二人のバンパイア

刹那

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
二人のバンパイア

【Ｎコード】
Ｎ７１７９Ｊ

【作者名】
刹那

【あらすじ】
クールなイケメンバンパイアと真面目でキュートなバンパイア。お互いにお互いのことを知らない二人が、ともに平凡な高校生活を送る。そんな二人の間に起こるハチャメチャな出来事に二人は立ち向かう！

プロローグ（前書き）

読んでいただきありがとうございます！
初めての小説の投稿です！
誤字、脱字を発見された方は報告していただけたらうれしいです！

プロローグ

「んーっ！朝か…」

いつものようにベッドから起き上がりカーテンを開ける。
眩しい朝日が突き刺さる。

俺の名前は紅月　夜（あかつき　よう）。今は一人暮らしをしている。昔はおじと二人暮らしをしていたが、俺の１２歳の誕生日の次の日に手紙を残していなくなってしまった。

「夜へ。とても大切な急用ができた。急にいなくなった事を許して欲しい。おまえに１つ知っていて欲しかったことをここに書く。おまえの両親は生きている。今は遠いところにいるが、時が来れば会えるかもしれない。伝えたかったことはこれだけだ。体に気をつけろ。」

俺の両親が生きている…

でも、会いたいとは思わない。

その気持ちは今も昔も変わらない。

俺には両親の記憶がないからだ。
両親だけではなく子供の頃の記憶がない。記憶障害らしい。
それだけではなく、俺はとてもまれな体の変化をともなう二重人格らしい。そして、人格の入れ替わりが起こるのは、いつも決まって輸血をしたあとだ。おじが言うには、俺の体は血液を作り出す機

能が人より低く、定期的に輸血しなければならないそうだ。

何年か過ごすうちに分かったことがある。
それは、もう1つの人格の記憶がはっきりとはしないが俺にも残っているということだ。会ったことのない人の名前がなぜか頭に浮かぶことがあったりするのもそのためのようだ。

「7時か。」
今日は高校の入学式がある。
「はぁ…学校か…」
正直、学校にはいい思い出がない。輸血のたびに人格が変わってしまっていたので、友達もできず学校もロクに行けなかったためである。

「めんどくさいけど…行くしかないよな…」
俺はリビングに降り、朝食の支度をした。

表と裏

朝食を食べ終え、制服を着る…いつもと変わらない。違うのは新しくなった制服だけ。

「学校か…久しぶりだな」

俺にとっては2週間ぶりの学校だった。

家を出てしばらく歩くと、高校が見えてきた。神宮（かみのみや）高校というここらでは結構有名な高校だ。受験のときにも一度見たが立派な建物だ。

そういえば、高校受験に前期と後期があってよかったと思う。そのおかげで俺ともう片方の俺が受験する事ができ、両方とも合格することができた。

さっきから周りがうるさい気がする。

「あの人、カッコよくない？」

「彼女とかいるのかな？」

いちいち気にするのもめんどくさいので無視して歩くことにした。

学校に着くとすぐに入学式が始まった。校長先生の話は簡単に言えばとても退屈な時間だった。多分聞いていたやつなんてほんのわずかだろう。そんな退屈な時間の中、俺は眠りに落ちていった。

その後も入学式は続き、終了のチャイムによって、俺は心地よい夢の中から現実に引き戻された。

教室とクラスメイト

入学式が終わると、俺たち生徒は先生に連れられ教室に向かった。
1年A組。どうやらここが俺のクラスらしい。教室に入ると、二十代後半くらいの先生らしき若い男が生徒の名前を呼び席に着かせていた。

「紅月！」
俺の席は窓際の一番後ろの席だった。
「俺、杉本　舜（すぎもと　しゅん）！よろしく！」
前の席の男子が話しかけてきた。
「あぁ…よろしく。」
俺は適当に返事をして、また眠りについた。

「…あ…つき…紅月！」
先生が俺の名前を呼ぶ声で俺は目が覚めた。教室中のみんなが俺のほうを見ている。
「入学式早々居眠りとは、おもしろいやつだな。自己紹介を早くしてくれ。」　自己紹介…？どうやら他の生徒は済ませたようだ。

「名前は紅月　夜。よろしく。」
俺が自己紹介をすると、クラス内からざわめきが起こった。
「おまえ人気だな！男の俺が言うのもなんだけど、おまえイケてるもんな～」
杉本…だっけ？そいつが話しかけてきた。
「イケてる？なにがだ？」
俺はそう質問すると、
「自覚ないのかよ…。俺もそんな顔に生まれたかったぜ。」

顔か…。俺は普通だと思うが…
「そうか…」
正直、自分のことなんてどうでもよかった。

その後、先生が諸連絡を終え、放課となった。
俺は帰るために席を立とうとすると、女子が俺を包囲していた。

「どこからきたの？」
「メアド交換しよ！」
「好きなタイプは？」
「彼女いるの？」

はぁ…うるさい。

「はい、ちょっとどいてくれる～？」
その中を分け入ってきたのが杉本だった。
「おう！俺とどっか行かね～？」
遠回しに俺を助けてくれると言っているようだ。
「あぁ…」
俺はそう言うと、杉本についていった。
残された女子たちは杉本を「邪魔しやがって」みたいな殺意のこもった目で睨んでいた。

「けっこう眺めがいいな…」
俺は杉本に連れられ、屋上に来ていた。
「だろ！俺が見つけたんだぜ！」
いや…屋上なんて入学一週間もしないうちに見つけられるって…
「まぁ…助かった。」「いや…俺はおまえにばっかり女子がまとわりつくのが嫌だっただけだ！」

「…」
こいつ…子供か…
「とりあえず、仲良くしよーぜ、夜！」
「いきなり呼び捨てかよ…」
「俺のことは舜って呼んでくれ！」
「しかも…シカトかよ…」
「んじゃ、そろそろ帰ろうぜ！」
「はいはい…」

こうして俺の高校生活1日目は終わった。

屋上で

入学してから1週間が過ぎた。
相変わらず、女子が付きまとってくるのは変わらなかった。
俺は授業を受けるのも、女子の相手をするのも面倒だったので、屋上に来ていた。
授業を受けないなら学校に行く必要などないのだが、もともと授業日数の半分は最低でも欠席する事になるので、校長先生とあらかじめ交渉をし、テストで一定段階以上をとればよいということになっていた。勉強に関しては、俺かもう片方の俺がやってくれれば記憶に残る。もう片方の俺には悪いが、俺は勉強が大嫌いだ。この学校も、もう片方の俺のおかげで入れたようなものなのだ。そのことには感謝しているが…
「やっぱり学校ってめんどくさいな…」
空を見上げた。どこまでも澄み渡る青い空。その中を風に流され、浮かんでいる白い雲。
「…雲はいいよなぁ…」
俺は屋上の一段高くなっている場所で横になり眠りについた。

「イヤッ！離してッ！」

俺は嫌がる女の声で目が覚めた。
「なんだ…？騒がしい…」
声のした方を見てみると、1人の女子が5人の男子に取り囲まれていた。
「だれだ！そこにいるのは！？」
男子の1人が俺に気づいた。どうやら上級生のようだ。
「なんだ1年か。痛い目に会いたくなかったら、そこでおとなしく

しとけ！」
男子5人で群がって女子1人を襲う…か。
「まぁ…俺には関係ないしな…」
『目の前で女の子が襲われてるのに逃げるの？』
俺がそう思った瞬間、女の声が聞こえた。
「だれだ？」

『うーん…もう一人のあんたかな？』

「…！話せるのか？」

『そんなことより、早くあの子を助けてあげなさい！それでも男？』

「わかったよ…」

俺はそう言って、男子グループの方を向くと、男子は女子の制服を無理矢理脱がせている。
「お前ら！軽く俺と遊ばない？」
俺が挑発すると、5人組の内2人が出てきた。
「てめえ、ふざけてんのか！？」
「痛い目に会わせねーとわからねーみたいだな！」
そう叫んで、迫ってきた。

「ったく…めんどくさい…」
俺がそうつぶやいた瞬間、2人は飛びかかってきた。俺は体を軽く傾け、それを受け流すと、1人に強烈な回し蹴りを放った。

「次は誰の番？」
そう言うと、さっき飛びかかってきたやつが、背後から襲いかかる。俺は身をかがめつつ、体を回転させ、そいつの腹に拳を打ち込

んだ。

「さて…あと3人か…」

「チッ…ふざけた野郎だ！やっちまえ！」

リーダーらしき人物が叫ぶと、その横にいた2人が殴りかかってきた。だが、その拳は空を切り、代わりに鋭い膝蹴りが腹部を襲った。2人は苦しそうに腹をおさえていた。

「はい…あと1人。」

俺がそう言うと、女子を押さえ付けていたリーダーらしき人物が慌てて逃げていった。

「大丈夫か…？」

一応、女子の安否を確認する。

「ぁ…大丈夫…」

よっぽど恐かったのだろう。体が小刻みに震えている。制服も所々破られていた。

「とりあえず、これ着ろ。」

俺は着ていた制服の上着を渡した。

「あ…ありがとう…」

その女子はそう言って、上着を受け取った。

「立てるか？」

そう尋ねると、その女子は立ち上がろうとしているようだが、足に力が入らないようで、立つことは叶わなかった。

「乗れ。」

俺は女子に背を向け、身をかがませた。女子も少し戸惑ったようだったが、身をあずけてきた。

女性らしい体の膨らみが背中に当たってしまうことに気付くと、

この運び方にしたことを少し後悔した。
（まぁ…他の運び方でもあんまり変わらないか…）

一方の女子はというと、
（憧れの紅月くんにおんぶしてもらえるなんて…襲われてよかったかも！）
こんなことを考えていた。

「さて…どこに連れていけばいいんだ？」

「ずっとこのままで！」

「はぁ？」

「ぁ…保健室までおねがい…」
（本心が出てしまった…）

「あぁ…わかった。」

「ところで、あなたは紅月くんだよね？」

「どうして俺の名前を？」

「この学校では超有名だよ！」

「なんで？」

「それは…カッコイイから！」
そう言うと、女子は一層強く抱きついてきた。

「また面倒くさそうなことになってるし…」

こんな会話をしながら、俺たちは保健室に向かって行った。

キケンな保健室（前書き）

学年末テストがあり、更新に間が空いてしまいました。すいません！

キケンな保健室

この学校の保健室は一階にあった。
スライド式の扉を開けると、白衣を着た若い女性が目に入った。
茶色のショートヘアー。白衣の上からでもわかるほど強調された胸。
その白衣は、何故か胸元が開かれている。先生がこんな格好してていいのか？

「あら、夜くん。こんにちは。」
初対面なのに、昔から知っていたかのような感じで話しかけてきた。

「知り合い？」

「いや…初対面。」
後ろから女子が尋ねてきたので、答えると、
「覚えてないかしら？まあ、あのときは子供だったから無理もないわね。」
何かを思い出すように窓の外を眺めながら話している。

（この人、俺の子供のころを知っているのか！）
『これは詳しく聞く必要がありそうね。』

（って…おまえいたのかよ！）

『ずっといたわよ！』

（心の中をのぞかれるのも気持ちのいいものじゃないな…）

『のぞきたくてのぞいてるんじゃないの！』

（はいはい…）

心の中でこんなやりとりをしていた。

「お取り込み中のところ悪いんだけど、今日はどんなご用？」

「…本人に聞いてください。」

そう言って、俺は背負っていた女子を降ろした。

俺が話せばよかったのだが、正直そんな余裕などなかった。この先生が俺たちの心のやりとりに気付いていた様子だったからだ。

（この人、心の中でも読めるのか…？）

『さすがに二重人格じゃ読めないでしょ…』

（なら…二重人格であることを知ってたとか？）

『ありえるかも…』

（俺の子供のころを知ってるみたいだったし…）

俺は先生の方をじっと見つめていると、その視線に気付いたのか、俺の方を向き、ウインクをしてきた。そして俺たちは思った。

（『この人、何者！？』）

それから数分もすると、話が終わったようで、二人は俺の方へ向かって歩いてきた。

「今日はありがとう！」

女子は急にそう言って、俺に飛び付いてきた。俺は後ろに倒れないよう、必死に彼女を受け止めた。

「っ！…ちょっと離してくれない？」

「…もうちょっと…このまま…」

（俺のことは無視かよ…）

『すっかり好かれちゃったみたいね。』

（誰のせいでこうなったと…）

『私のせい？でも、私はあんただから、結局は自分のせいってことでしょ。』

（なっ！）

口ではこいつに勝てない。そう思った。

「…ありがとう…」

しばらくすると、満足したのか、俺を解放してくれた。

「1年D組、片岡　愛美（かたおか　えみ）！よろしく！」

彼女は俺を見上げそう言った。透き通った栗色の瞳。肩にかかるほどの黒髪。身長１５０ｃｍほどのすらりとした体に、標準ほどに膨らんだ胸。襲ってきた男子たちの気持ちが分かるほどの美少女だった。

「あぁ…よろしく。」　彼女は俺をもう知っているみたいだったので、自己紹介はしなかった。

「今は授業中だし…二人とも終わるまでここにいていいわよ。」

「いや…俺は…「紅月くんもいてくれるよね？」…なんで俺が…「ダメ…？」」
いや…涙目で聞かれても…
『ここで断ったら、男じゃないよね～！』
「はぁ…いてやるよ…」
そう言ったとたん、泣きそうだった表情は輝かんばかりの笑顔に変わっていた。
（おまえ…嘘泣きって分かってただろ…）
『ん？何の話？』
（…性悪女…）
『なっ！誰が性悪女よ！』
そんなこんなで、俺は半強制的に保健室にいることになった。
「ところで、先生は俺のこと知ってるんですか？」
「この学校の人気アイドルってこと？」
「…俺の子供のころを知ってるんですか？」
「あのころは可愛くて食べちゃいたいくらいだったのに、今は可愛いって言うよりもカッコイイって言った方が合ってるものねぇ…」
「ですよねぇ～！」

（どこに共感したんだ…こいつは？）
ふと、愛美の方を見ると、視線に気付いたのか、可愛らしく笑いかけてきた。この笑顔でほとんどの男子は彼女に一目惚れしてしまうだろう。

１２時１５分、時計がその時間を示すと、授業終了のチャイムが校内に鳴り響く。

「それじゃ、俺は教室に帰ります。」

「あら、もう帰っちゃうの？」　残念がる仕草を見せる先生。だって昼飯食いたいし…

「それなら、私も！」
愛美がベッドから立ち上がろうとすると、

「愛美ちゃんは少し用があるから残っててくれる？」

「えっ…でも…わかりました…」
よほど俺と帰りたかったのか、とても悲しそうな表情で俺を見る。俺にどうしろと…？

「わかったよ…外で待っといてやるよ…」
俺がそう言うと、またニコニコ顔に戻る。

（女の子ってめんどくせぇ…）
そう強く思った。

「先生、用って何ですか？」

正直、今すぐにでも紅月くんのところに行きたかった私は先生に尋ねた。
だが、先生は何も言わず私をベッドに押し倒した。
「先生…？」
先生の顔が私に近づいてくる。
（えっ…ま、まさか…）
私の予想は的中した。次の瞬間、先生と私の唇が零距離に…
「んむっ…！」
抵抗しようとしたが、体に力が入らない。まるで口から力を吸い取られているような感覚だった。
「おっそいなぁ…何してんだ？」
保健室を出てから15分は経っただろう。
『女同士の話でもしてるんじゃない？』
「女同士の話？」
『あんたも女になったら分かるかもね。』
「ふざけやがって…」
俺をからかうような言い方で話しかけてくる高く甘い声。
「ところで…なんで話ができるようになったんだ？」
『それが分からないのよね…』

「そうか…」
俺たちの体の謎がまた1つ増えてしまった。

「とりあえず、呼びに戻るか。」
保健室の扉に手をかけようとした瞬間、体に寒気が走った。この扉を開けたら、見てはいけないようなものを見てしまうような気がする。ただ、このまま時間が経つのも嫌なので、保健室の扉をゆっくりと開ける。

「な…何してるんですか…？」
俺の見つめる方向には、重なった2つの体があった。1つは、上にのしかかっている先生。もう1つは、されるがままになっている女の子、愛美だ。

「あら、入ってきちゃった？」
先生が愛美を解放しながら、俺に話しかけてくる。

「大丈夫か…？」
顔が真っ赤になっている愛美に話しかけた。

「はぁ…はぁ…大丈夫…」
まだ息が乱れている愛美は、どうみてもまだ大丈夫ではなさそうだった。

（この先生…要注意人物だな…）

『色んな意味でね…』

甘いハプニング

その後、愛美の息が整うのを見計らって、ベッドから降ろし、立たせようとしたが、彼女の細い足は自分の体重を支えることができず、彼女は座り込んでしまった。

「先生…何したんですか？」

愛美のあまりの疲れように疑問を持った俺がそう尋ねると、

「夜くんにもしてあげようか？」

先生は熱い視線で俺を見つめてきた。俺は身の危険を感じ、とっさに床に座り込んでいる愛美の背と足に腕を回し、抱え上げて、目にも止まらぬ速さで保健室を出た。

取り残された先生は、少し驚いた表情で、「さすがね…」と、呟いていた。

一方、逃げ出した俺たちはというと、周りからの痛いほどの視線を感じていた。普段はクールな美少年が可愛らしい美少女をお姫様だっこして、廊下をすさまじいスピードで走り抜けていく様子が、皆の目を集めないわけがなかった。

「なによ！あの子！」

「見せつけやがって！」

「私もあんな風にされたい…」

男子女子関係なく、殺気立った目や羨みの目で見てくる。

「悪いな…こんなことして。」
皆の視線を集めてしまっていることを謝罪した。
「ううん…大丈夫…」
一方、愛美は憧れの夜にお姫様だっこされているのが幸せ過ぎて、でも皆に見られているのが恥ずかしくて、真っ赤に顔を赤らめていた。

「歩けるか？」
1年D組。愛美の教室の前でそう尋ねた。
「うん…」
愛美はもう少し夜にお姫様だっこされていたかったが、迷惑になってはいけないと思ってそう言うと、夜は愛美をゆっくりと降ろした。
「ありがとう！」
皆が見ている前で俺に抱き着いてきた愛美。
（今日何回目だよ…）
『彼女はあんたにメロメロみたいね！』
（はぁ？何言ってんだ？）
『はぁ…鈍感ね…』
（鈍感で悪かったな！）
口では勝てないことを学習した俺は、開き直ることにした。

一方の愛美は、

（紅月くん、何考えてるんだろう…）

抱き着いても何の反応も示さない夜に、悪戯心が生まれた愛美は徐々に夜の頬に顔を近付けている。

『開き直っちゃって…口では私に勝てないことを理解したのかしら？』

（なっ！）

『図星みたいね！』

夜は愛美の行為には全く気付いていなかった。

その間にも、距離は縮まっていく。

『ねぇ…』

（なんだ…？）

『……右！』

タイミングを見計らったかのような間を挟み、急に方向を示す。俺はその声につられて右を向いてしまった。

（もう少し…）

確実に私の唇は紅月くんの頬に近付いていた。私はときどき紅月くんの表情を確認していたが、気付く気配は全くない。

あと数センチ。私は頬にするだけなのに、ドキドキしていた。そのとき、何の前触れもなしに、紅月くんが私の方を向いた。私は心

臓が止まるくらい驚き、目を見開いた。ただ、もう手遅れだった。
俺が右を向くと、その先には愛美の顔が目の前にあった。愛美と目が合うと、彼女は驚いたのか、目を見開いていた。
夜と愛美の唇は軽く触れる。その行為には合わない二人の驚いた顔。周りからの鋭い視線。そして、柔らかい唇の感触。
紅月くんが私の肩を持ち、優しく私の体を離す。止まっていた頭がフル回転で状況を整理する。
（私…紅月くんと…キスを…）
そう思ったとたんに、全身が熱を持つ。多分顔も真っ赤に染まっているに違いない。恥ずかしくなった私は下を向き、赤くなった顔を隠そうとした。
『あははっ！』
こうなることを予想していたかのような笑い声。
（おまえ…まさか…）
『そうよ。こうなるようにタイミングを図ったの！』
（彼女の気持ちも考えろよ…）
『彼女の気持ち？そんなの見れば分かるじゃない！』
俺は言われた通りに彼女の顔を見ようとしたが、俯いてしまっていた。
（完全に嫌われたな…）

『あんた、どんだけ鈍感なの！？』

（ん…？嫌われてないのか？）

『もういいわよ…』

（おい！教えろよ！）

俺の願いなどはなくから聞く気はないようで、そう言うと全く声が聞こえなくなった。

（自分で確かめろってことか…？）

そう思った夜は愛美の顔を下から覗き込んだ。夜が覗き込んでいるのに気付いた愛美は、さらに恥ずかしくなり、手で顔を覆って隠した。夜はその行為を、愛美が泣いているのだと勘違いし、どうしていいかあたふたしている。

「悪いっ！」

私の目の前で紅月くんが土下座してる。

（…って…なんで…？）

今までのことを整理してみよう。

偶然のキス…私が俯く…紅月くんが覗き込む…私が顔を手で隠す…紅月くんの土下座…

（もしかして…勘違いしてるのかな…？）

そう思ったとたん、私はある計画を思い付いた。

「…責任…とってよ…」

涙声で紅月くんに話しかける。もちろん全て演技。

「セキ…ニン…？」
効果はバツグンだったようで、かなり動揺している。
「何でもしてくれる…？」
私は目に涙を浮かべ、彼の目を見つめる。
「…わかった。」
彼はしぶしぶ私の要求をのんだ。
（やった！上手くいった！）
私は心の中で歓喜の声を上げた。もちろん私のやりたいことはもう決まっていた。

「それじゃぁ、次の日曜日買い物に付き合って！」
今の今まで泣き顔だったのが、あっという間に明るい笑顔に変わる。
「いや…やっぱり…「今更さっきの発言を取り消すだなんて言わないでよ！」…くっ…」
ハメられた…完全に相手の思うつぼだ…。
（何か…逃げ道は…）
『1つないこともないわよ。』
（教えろ！）
『人にものを頼む態度がなってないわよ！』

（…教えて…ください…）

『やだ。このままのほうが面白そうだし。』

（こいつ…）

二匹の悪魔の相手なんかやってられっか！

（…そういえば、今日は水曜日だから…買い物なんかに付き合わされなくても済むかも。）

そう、俺は今週の金曜日に輸血し、こいつと入れ替わる予定になっていた。

「悪いけど、俺金曜日から2週間ほど日本にいないから。」

2週間いないのは本当だが、入れ替わると言っても信じてくれるとは思えないので、適当な嘘をつく。

「嘘つき…何でもするって言ったのに…」

その言葉が俺の胸に突き刺さる。

「あんな可愛い乙女を泣かせやがって！」

「あんなやつ俺が許なねえ！」

周りの男子からの殺気が漂う。

「…わかったよ…行けばいいんだろ！」

なんていうか…女の涙ってずるいよな…。

「ちゃんと約束守ってね！」

急に立ち上がったかと思うと、そう言い残して、嬉しそうに教室に入っていく。

（はぁ…2日も耐えられるのか…）

今までにも数回輸血を忘れていたことがあったが、その次の日のあまりの倦怠感に耐えられずすぐに輸血をしていたのだった。1日も耐えられなかったのに、2日も耐えられるのだろうか。そんな不安が日曜日までの数日を憂鬱にさせた。

甘いハプニング（後書き）

夜「はぁ…またやっかいなことに巻き込まれてきた…」

愛「次回はいよいよ私と紅月くんとのデート！」

夜「だるいし、行きたくない！」

愛「約束破るの…？」

夜「嘘泣きしても無駄だぞ！」

愛「まあまあ。ここで何言っても次回の内容は変わんないし！」

夜「作者のヤロウ…」

悲劇の幕開け

そして、約束の日曜日の前日の土曜日。昨日輸血をしなかった俺は、１日中何もやる気がせず、必要最低限の食事だけを取り、あとは寝てばかりいた。

＞＞ピンポ～ン＜＜

「ぅ…」

頭がズキズキする。体もいつもより数倍重く感じる。

「こんな朝早くから誰だ…？」

俺がノロノロとベッドから起き上がっていると、

＞＞ピンポン、ピンポン、ピンポン…＜＜

「連打するなよ…」

時刻はＡＭ７：３０。なんて礼儀知らずなやつだと思った。フラフラする体で玄関に立ち、扉を開ける。

「紅月く～ん！」

「こいつか…」

扉の前に立っていたのは愛美だった。

「約束覚えてる？」

「あぁ…覚えてるよ。」

覚えてないわけないだろう。そもそも忘れていたら、こんな辛い思いもする必要がない。でも、ちょっと早すぎると思わないのか？今は日曜日、それも午前中！普段の俺ならまだ普通に寝てる時間帯なのに…。

「ちょっと待て…。おまえ、どうして家の場所を知ってるんだ？」

もちろん教えた覚えなどない。

「そこは…ね？」

いや…わかんないし。

「そんなことより、早く行こっ！」

「おまえ…今何時だと思ってる？」

「おまえじゃなくて愛美って呼んでよ！」

俺の質問は無視ですか…

「で、こんな朝早くから何の用？」

「迎えに来たついでに、朝ごはんをご一緒させてもらおうかなって！」

なんて利己的な考えなんだ…。だいたい、俺には他人に出せるような朝ごはんを作る技術はない。

「あ！もちろん作るのは私だよ！」

「それなら…って良くないし！」

危うく相手の口車に乗せられるところだった。ただ、彼女は俺の意見などはなくから求めてはいないようで、勝手にキッチンに向か

って走り出す。体調が絶不調の俺は、彼女のやりたいようにやらせた。

「紅月くん！できたよ！」
私が呼んでも、一向に返事が返ってこない。

（もしかして、勝手にキッチン使って怒ってるのかな…）
私が捜索を始めると、意外と早く彼は見つかった。リビングにあるソファの上で眠っていたのだ。

「カワイイ…」
普段のクールな風貌からは想像出来ないほど可愛らしい彼の寝顔は私を癒した。私は自分の携帯を取り出すと、彼の寝顔をカメラに収めた。

「ん…」
心地よい夢の中から目覚めると、可愛らしい美少女が俺を見つめている。

「って…何？」

「あ…起きちゃった？」
何やらいい香りがする。そういえば、今は何時だろうか？

「今、何時？」

「う～ん…9時ちょっと前だよ。」

「9時！？おまえ今まで何を…？」
「愛美って呼んで！」
「今まで何してたんだ！」
「そうカリカリしなくてもいいのに…」
（はぁ…もう付き合ってらんねぇ…）
立ち上がろうとしたその瞬間、軽いめまいに襲われた。
（頭痛…酷くなってるな…）
めまいの原因が輸血していないせいだとわかると、急にあるおぞましい考えが頭をよぎった。
（こいつから血を頂けば…）
『あんた…大丈夫…？』
こいつに指摘され、こんなことを考え付いた自分が恐くなった。
「紅月…くん…？」
愛美が心配そうな顔をして俺を見つめている。
「…どうした…？」
「どうしたじゃなくて顔色悪いよ！」
どうやら俺の心配をしてくれていたみたいだ。
「悪いな…。よし！飯食おう！」

「うん！」

テーブルの上を見ると、和食を中心とした料理が並んでいる。

（これあいつが作ったのか…？）

『すご…』

うちは基本的に朝はパン食と決まっているので、朝から和食を食べるのはとても贅沢なことのように思えた。

「どうかな…？」

「どっかの誰かさんが俺をすぐに起こしてくれてたら満点だったのにな。」

味は絶品だが、料理が冷えてしまっているので最高とまではいかなかったのだ。

「あれは不可抗力なの！たぶんどんな女の子でもあの寝顔を見たらその場から動けなくなっちゃうよ！」

（そう力説されても…。だいたい俺の寝顔が人を惹き付けるわけないだろ…）

自分のことはまるでわかっていない夜であった。

朝食を食べ終えると、約束の買い物という名のデートに付き合わされることになっていた夜は、自分の部屋に戻ると適当に服を選ぶと、下で待っている愛美のもとへ向かった。

「何かおかしいか？」

俺の姿を見つめっぱなしでいたので尋ねてみた。

「紅月くんの私服姿…レア！」

「は…？」

愛美はサッと携帯を取り出し、写真を撮ろうとしていた。

「あのさぁ…行くなら早く行こ…」

呆れながらそう言って玄関に向かう夜。それに着いていく愛美。

玄関の扉を開けると、鋭い日差しが目を突き刺した。空を見上げると雲１つない青空。

（頭がズキズキする…）

このまばゆい日光は今日の俺には最悪の相性だった。

「とりあえず商店街にでも行くか。」

「エスコートお願いしま～すっ！」

「…え？」

左腕に飛び付いてきた愛美を避けようとしたが、体が思うように動かず左腕の自由を失った。

「離し…「やだっ！」」

「…放り投げるよ？」

「泣いちゃうよ？」

（こいつ…）

『あんたってほんと女の子に弱いわね。』

（あぁ…女子恐怖症になりそうだ…）

『なれば？』

（はぁ…おまえがこの場にいたらこの手で殴り飛ばしてやるよ…）

『返り討ちにしてあげるわ！』

（…どこからそんな自信がわいてくるんだよ…）

『だってあんた弱そうだし！』

（はぁ…もういいよ…）

そうこうしているうちに商店街に到着した。

「何を買うんだっけ？」

「う～ん…服とか、服とか、服とか？」

「は…？」

「こっちこっち！」

俺は左手を引っ張られながら無理矢理店内に連れていかれた。

その後は地獄のようだった。愛美の長い長いファッションショーを見せられ、その度に感想を述べなければならなかった。さらに、俺の評価がよかったものは俺に持たせていく。多分買うつもりなん

だろう。
店を出る頃には、俺の手には大量の紙袋が吊り下げられていた。
「自分で持てよ…」
「こういうのは男の子の仕事だよ！」
そんな理不尽な理屈で片付けられてしまった。
（あぁ…もう限界だ…）
もともと最悪の体調だったのに加え、大量の紙袋を持たされた夜は愛美に手を引かれフラフラと人混みの中を歩いていた。
「それじゃあランチにしよ～！」
今はＰＭ１：００。かれこれ３時間ほどはファッションショーに付き合わされていたので、かなり腹は減っていた。愛美が俺の手を引き、目の前にあるファミレスに行こうとした瞬間、
ドスッ…！
「どこ見てあるいてんだコラァ！！」
俺はヤンキーっぽい男にぶつかってしまった。俺はフラフラと立ち上がると、何事もなかったかのように落とした紙袋を拾い上げその場から立ち去ろうとしたが、
「おい！てめえ！面かせや！！」
胸ぐらを掴まれ体が宙に浮く。そのまま暗い路地裏へ連れていかれた。
「少し顔がいいからって調子乗ってんじゃねーぞ！」

ボスッ！

みぞおちに強烈なパンチを受け崩れ落ちる。

「紅月くん！！」

どうやらこの男の仲間であろう男2人が愛美を無理矢理連れてきたようだ。

（こいつもほんと運が悪いよな…）

ついこの間襲われたばかりの愛美に少し同情していると、

「よそ見してんじゃねえ！」

ゴスッ！

顔めがけて鋭い蹴りが飛んでくる。いつもの俺なら軽く避けれただろうが、今の俺には無理な相談だった。

さらに男は俺を蹴り続け、俺の頭から流れ出た血は顔をつたい地面を紅く染め上げていた。目の前の光景が歪んでいく。愛美が俺の方を見て目に涙を浮かべている。

（こいつだけでも助けたかったな…）

意識が遠のいていく。

『夜！夜！！』

（俺の名前知ってたんだな…。こいつの名前、今度聞いてみようかな…。俺が死んだらこいつはどうなるのかな…）

ふとそんなことを考え、俺は意識を失った。

「紅月くん！！」
彼は私の方をゆっくり見上げた。頭から流れる真紅の血。あまりにも大量に流れ出ている。そして、彼の目から光が消えた。
（紅月くんが死んじゃう！）
そう思ったとたん、私は無我夢中で私の腕を掴んでいる男の手に噛み付いた。

「痛ぇッ！なにしやがんだ！」
そんな言葉には耳も貸さず、倒れている彼の方へ走った。
でもそんな私を、彼を痛め付けていた男はあっけなく捕まえた。

「イイ体つきしてんじゃねえか！」
男が私の上着に手をかけた。

（私…こんな男どもに好き勝手にされるんだ…）
そう思った瞬間、私を捕らえていた男が真横を吹っ飛んでいった。

（え…？なに…？）

周りを見回すと、さっきまでそこにいた男は十数メートルほど遠いところで地面で気絶していた。

「…化物だ…」

男の仲間の1人がそう呟くと、もう1人の仲間と一緒に気絶した男を担ぎ上げ、一目散に逃げていった。

「紅月…くん…？」

私の目の前にいるのは彼であることは間違いない。ただ、さっきまで茶色っぽかった髪と澄んだ青色の瞳は血のような紅に染まっていた。

「…血…」

紅月くんが何かを呟きながら私の方を見る。獣のように獰猛な目で私の体を見つめている。

（違う！これは紅月くんじゃない！）

私はその場から逃げ出そうと彼のいた方向と逆の方向へ走り出した。

「え…？」

しかし、さっきまで逆方向にいたはずの彼は今私の目の前に立ちふさがっていた。

「あなた…だれ…？」　彼の姿が消えたかと思うと、首筋にチクッとした痛みを感じた。そして、温かく柔らかい何かが触れたかと思うと、急に体の中の温かいものが失われていく感覚が生まれ、目の前が真っ暗になっていく。

（私…どうなるのかな…）

私はそのまま意識を断った。

悲劇の幕開け（後書き）

愛「え？なになに？この急展開！」

夜「まぁ…おまえはもう用なしということで！」

愛「なにそれ！まだ死にたくないよ！」

夜「冗談だよ…」

愛「そんな冗談いらないっ！」

夜「あっそ」

愛「なに、その適当な相づち！」

真実と女の子

「ここは…？」
目が覚めると、私は白いカーテンで仕切られたベッドの上に寝そべっていた。

（ここ前に見たことがあるような気がする…）
そう思い周りを見ていると、カーテンが開いた。

「目が覚めたみたいね。」

「…保健室の先生？」
私の目の前にいたのは高校の保健室の先生だった。

（なんで保健室に…？）
頭の中でこれまでのことを整理する。

（私…紅月くんに襲われて意識を失ったんだ…）
あのときの獣のような目を思い出すと体が震えた。

「あの…紅月くんは…？」
それでも紅月くんのことが気になって尋ねてみた。

「彼ならあっちで寝てるわ。」

（よかった…無事だったんだ！）
彼の様子を見に行くためにベッドを降りたが、急に立ちくらみがして少しの間動くことができなかった。

「あんまり無理しない方がいいわよ。それに今は見に行かない方がいいかもね。」
先生がそんなことを言っていたが、今は会わない方がいいってどういう意味なんだろう。余計に紅月くんの様子が気になった私は、先生が指差していた方にあるカーテンで仕切られた空間へ向かって行った。
そっとカーテンを開けると、妖精のように可愛らしい女の子がベッドの上でスヤスヤと眠っているのを見つけた。
（あれ…？間違えたのかな…）
私はそっとカーテンを閉め、他のベッドを見渡してみたがカーテンすら閉まっておらず、ベッドで寝ているのはあの女の子だけだった。
「やっぱり気付かなかったかしら？」
私が紅月くんを探しているのに気付いたのか先生は少し悲しそうな表情をして話しかけてきた。
「気付くって何にですか？」
今わかっているのは、私は生きていられたということ。ここが保健室で、ここには私と先生と眠っている女の子の3人だけしかいなくて紅月くんらしき人物はいないということ。別に気が付くようなところなんて何もない。
「何から話せばいいのかしらね…」
先生は少し考え込むような仕草をしていた。
「夜くんは見つかったかしら？」
急にそんな質問を投げかけてきた。

「私の探した範囲では見つかりませんでした。」
先生は紅月くんの行方を知っている様子だったのでそう返した。
「ヒントをあげるわ。ここには私とあなたと夜くんしかいないのよ。」
「…え…？」
（それってどういうこと？この部屋には私と先生と紅月くんしかいないって…。おかしい！だってここには女の子がいたじゃん！それに紅月くんもいないし…。私が見つけられなかっただけかもしれないけど、それでもおかしいよ！）
私は混乱していた。先生が勘違いしているんじゃないかと思った。
「先生…何か悪いものでも食べたんですか？」
事態がのみこめない私はそんなことを言ってしまっていた。
「全て真実よ。」
（真実ってなに！？ぜんぜんわかんないよ…）
いつになく真剣な目で話している先生。とは言っても今までに会ったのは1度しかない。それでもいつもとは違う一面が説得力を生み出していた。
「見たでしょ？あっちのベッドで眠ってる女の子。彼女が夜くんなのよ。」
「…え？えぇぇぇぇ～！！」
「うるさいわね。」

急に後ろから声がしたので振り返って見ると、さっきまで眠っていたはずの女の子が真後ろに立っていた。

「紅月…くん…？」

こんな可愛い女の子に何を聞いているんだと思いながらも尋ねてみた。

「う～ん…そうと言えばそうだけど違うと言えば違うってとこ。」

つまりどういうことなんだろうと思っていると、

「あら、久しぶりね。」

「久しぶりというより初対面ですよね？」

先生と女の子とのやりとりが始まっていた。どうやら先生が勝手なことを言ってるみたいな感じだけど…。

「覚えてないならいいわ。それより伝えなきゃいけないことがあるから。」

「夜と私と…この子のことですよね？」

女の子は私を見ながらそう言った。

（この子って私の方が年上じゃない？）

そう思ったのも、女の子の身長は見るからに小さく顔立ちも幼いので、どう見ても小学生にしか見えなかったからだった。

「そうね…。まずあなたたちのことから話そうと思うけど、夜くんも聞いてるか確認してくれる？」

「夜くんも聞いてるってどういうことですか？」

「私と夜は身体を共有してるから、夜の意識があれば私の聞いたことが夜にも聞こえてるってこと。」
私がそう尋ねると先生の代わりに女の子が教えてくれた。

「…聞いてるみたいです。」
しばらくすると、不機嫌そうな顔をした女の子がそう言った。

「どうかしたの？」
少し気になった私がそう尋ねると、さっきまでの不機嫌そうな顔が嘘のようにニコッと笑ったかと思うと、
「こっちの話。」
一言だけそう言うと先生の方を向いてしまった。

（こっちの話ってとっても気になるんだけど…）
そんなことを思っている内に先生がまた真剣そうな目で話し始めた。

「単刀直入で言うけど、純ちゃんと夜くんはバンパイアなの。」

「「ばんぱいあぁ～！？」」
2人の間の抜けた声が保健室に響き渡った。どうやら驚いたのは私だけではないようで横にいた女の子も知らなかったようだった。

「バンパイアってあの人から血を吸ったり、日光やニンニクや十字架とかに弱かったりするやつですか？」
私の持っているバンパイアのイメージをあげて質問してみた。

「そうね。確かに人から血を吸ったり聖なるものに弱かったりはす

るんだけど、日光とかニンニクは鋭い視覚とか嗅覚のせいよ。」
「信じられません。何か証拠とかないんですか？」
現実を受け止められなかった女の子が尋ねた。私が彼女の立場に立ったとしても信じられなかったと思うな…。
「証拠ならいくらでもあるわよ。例えば今あなたが夜くんと使っているテレパシー。バンパイアの代表的な能力の１つね。」
「これって身体を共有してるからじゃないんですか？」
「いくら身体を共有しているからと言ってお互いの意思が通じ合うわけじゃないわよ。他にも身近な話で言うと、夜くんとあなたのことね。」
私が理解できないままに進んでいく話が中断したかと思うと先生が私の方を向いていた。
「夜の暴走のことですよね？」
「そうよ。夜くんは輸血をしないでいたみたいじゃない。バンパイアにとって血は命の源。取らなければ弱って死んでしまうの。２日も耐えられた夜くんが逆にすごいわ。」
話を聞いている内に、自分の約束によって紅月くんが苦しんでいたことがわかり罪悪感で一杯になった。
「ごめんなさいっ！」
私は出来る限り頭を深く下げて謝った。
「こっちこそごめん。もとはといえば私のせいなんだ。」
「え？」

女の子の言っている意味が分からず彼女の方を見てみると私と同じように頭を下げていた。

「はい、そこまで。まだまだ話さないといけないことがあるのよね。」

先生が話を続けようとすると女の子は頭を上げ先生の方に向き直った。

「夜くんが我慢していたってことまではいいわね？血に飢えた夜くんは多分あなたの血を飲みたいという本能を理性で抑えていたんでしょうね。」

胸が締め付けられる思いがした。この場から逃げ出したかった。それでも彼のことを知っておきたかった気持ちが勝りここに踏みとどまった。

「不良たちに絡まれて夜くんが気を失うことによって抑えていた本能が表に出ちゃったんでしょうね。そしてあなたに襲いかかった。血を奪われたあなたは気を失い倒れた。」

「ちょっと待ってください。どうしてそんなに詳しいことまで知ってるんですか？」

女の子がそんな質問をした。

「ずっと見てたもの。」

先生は当然であるかのように簡単に答えた。

「見てたなら助けてくれてもよかったじゃないですか！」

女の子がそれに食って掛かった。

「あら、あなたたちをここに運んだのは誰だと思っているの？」

「あ…。それでももっと早く助けることくらいできたはずです！」

「そうなんだけどあのくらいの不良たちなら夜くん1人で大丈夫かなって思ったのよ。その考えが仇となっちゃってね。対応が遅れちゃったのよ。それに暴走したバンパイアと対峙するなんてさすがに危険だからね。だから血を吸ってる間に忍び寄って睡眠薬を打ったのよ。それもかなり強いやつをね。」

先生はそこで一息ついた。ふと女の子の方を見るとすごく難しそうな顔をしている。可愛い顔が台無しなのに…。

「まあ、ここまではいいとして問題はこれからなのよね。」

「まだ何かあるんですか？」

「さっき強い睡眠薬を使ったって言ったでしょ？あれは普通の人なら最低半日は起きないくらい強いものだったのよ。それなのにあなたは2時間もしない内に起きたの。多分あなたたちの封印が解けちゃったからだと思うのよ。」

「先生、封印なんて初耳ですけど。」

「あら、そうだった？実はあなたたちにバンパイアの能力をある程度抑える封印をかけていたのよ。その封印が今回の暴走によって解けちゃったみたいなのよね。」

「それって封印してなきゃいけないもの何ですか？」

「別に封印しなくてもいいんだけど…。あなたたちが色々と加減出来ればね。」

「加減…？」

「人間とバンパイアの間にはたくさんの違いがあるのよ。例えば運動能力や視覚、聴覚、嗅覚などの感覚神経とかね。」

「感覚なんて加減できるんですか？」

「できないから封印するの。それに封印しておいた方がいい能力もあるわ。例えばバンパイアと人間の成長スピードの違いとかね。」

「成長スピードの違いって何ですか！？」

先生と女の子のやりとりを聞いていると急に女の子が大きな声を出した。

「あら、そんなに興味があった？バンパイアは人間の半分くらいのスピードでしか成長しないのよ。見たところあなたもその症状に悩まされてるみたいだけど、封印が効いてなかったのかしら？封印にも個人差があるからそのせいかしらね。」

そう言いながら先生は自分の机の上を何かを探すようにさぐっていた。

「あったあった。これね。」

そんなことを言ったとたんに妙な機械音がした。音のした方を見ると、保健室の一角にさっきまではなかった狭いスペースができていた。

「ちょっとそこで待っててくれる？」

そう言うと先生はその狭い空間に入っていった。

「…ねぇ、キミ何歳？」
この雰囲気を和ませようと私はついそんな質問をしてしまった。
「15よ！！」
女の子は明らかに怒りのこもった目で睨み付けてきた。
「何よ！悪い！？」
私の疑惑の念を感じ取ったのかさらに恐い顔をしていた。
「もしかしてこの高校の生徒だったりする？」
「そうよ。悪い？」
完全に怒らせちゃったな…
「1年D組の片岡　愛美です。よろしく！」
一応自己紹介を済ませておいた。というより目的は彼女のことを知ることだった。
「知ってるわ。夜との会話聞いてたし。私は紅月　純（あかつきじゅん）。よろしく。」
そのまま会話が終わってしまいそうだったので私はすかさず彼女の手を握り握手をした。彼女は一瞬驚いた表情をしたがすぐに笑顔に変わった。
「へぇ～。もう仲良くなったみたいね。」
いつの間にか先生は戻ってきていた。手に何やら十字架のようなアクセサリーと小さな小瓶を持って。
「とりあえずこれがバンパイアの能力を抑えるためのものよ。」
女の子に十字架のアクセサリーを渡しながらそう言った。

「こんなので大丈夫何ですか？」
「大丈夫よ。ただのアクセサリーに見えるかもしれないけど効果は十分。」
先生がそう言っている間に女の子はもうそれをペンダントのようにして首から下げていた。
「それは出来る限り外さない方がいいわ。そうしないといつもより早く血が必要になるから。あとこれもバンパイアの力を抑える薬ね。」
女の子は先生から小瓶を受け取ると小さなフタを外して一気に飲み干した。
「まずっ…」
女の子は顔をゆがめていた。よっぽどまずかったのかな…。
「それじゃ私はまだやることがあるから。また明日ね。」
そう言うとあっと言う間に先生はさっきの狭い空間の中へ入っていった。
「まだ聞きたいことがあったのに…」
隣の女の子がそんなことを呟いていた。
「もう帰っていいのかな…？」
私は早く家に帰って状況を整理したかったので女の子にそう尋ねてみた。
「…また明日聞けばいいか…」
女の子は私の話なんて耳に入っていない様子だった。

「もぉ…」

（それにしてもこの子可愛いなぁ…。名前なんて言ってたっけ…。）
１３０ｃｍあるかないかほどの背丈。腰まである雪のように真っ白なロングヘアー。少し丸みを帯びた小さな顔に大きくてくりっとした青色の瞳。

（青色の目って…夜くんと同じじゃん！）
このとき初めて夜くんとこの子の共通点を見つけた。

（思い出した！紅月純ちゃんだ！）

「純ちゃん！！」
思い出したばかりの名前を彼女の耳元で叫んだ。

「！！」
叫んだとたん彼女の身体がはねた。その反応を面白がっていると、

「何がそんなにおかしいの？」
彼女が天使のような笑顔で私を見上げていた。彼女の周りにどす黒いオーラが漂ってるのも、青色の目の奥が笑ってないのも、きっと私の気のせいだよね？

「それじゃ帰るよ。」
彼女は私の耳を引っ張って保健室から私を連れ出した。

「痛い！痛いってば！」
彼女の低い身長のせいで耳を引っ張られている私は無理な体勢をとらされていた。

「このへんで許してあげるわ。」
彼女はそう言うと私の耳を離してくれた。
「まったく…身長差考えてよ…。」
「まだやってほしいの？」
「すいませんでしたっ！」
あれ…？私なんでこんな小さい女の子に頭を下げてるのかな？
「まあいいわ。帰りましょ。」
彼女が校門の方へ歩き出したので私はあわててそのあとをついていった。
「ところであなたのような可愛い女の子がどうして夜を好きになっちゃったの？」
突然そんなことを彼女は聞いてきた。
「紅月くんには内緒にしてくれるなら…。」
女同士だしいっかみたいなノリで話す気になった私はまず何から話すか考えていた。
「夜には言わないわ。あと紅月くんじゃなくて夜って呼んじゃっていいから。紅月じゃ逆に分かりにくいし。」
「うん。私が夜くんを好きな1番の理由は…やっぱり優しいところかな。」
私は夜くんが私を助けてくれたことを話した。でも彼女は知ってるような様子だった。私何か重要なことを忘れてるような気がする…。

「ふ～ん…。だってさ、夜。」

「え…？」

「さっき言ったでしょ？私の聞いたことは夜にも聞こえてるって。」

「それって…」

私は顔が真っ赤になっていくのを感じた。

「それじゃ！」

彼女は逃げるように走り去っていった。

「なにそれ～！！」

私はだんだん遠ざかっていく彼女に対する思い付く限りの悪口を叫んでいた。

真実と女の子（後書き）

純「純で～す！皆さまよろしくおねがいしま～す！」

夜「性悪女なんで皆さん気を付けてください。」

純「性悪女って何よ！」

愛「純ちゃんひどいよ…。」

純「もう！私が悪かったわよ！」

夜「ほんとに反省してるのか分かんないな。」

愛「そうだよ！もっとちゃんと謝って！」

純「…ごめん…。」

愛「声がちっちゃい！」

夜「なんか立場逆転してない？」

変化

「あっつ～い！」

『はぁ…それで何回目…？』

「頭もガンガンする～！」

『言っててもマシにならないって。』

「それもそうだけど…。」

『珍しく素直なんだな。』

「珍しくは余計！」

『はいはい…。』

現在午後１１時。私は体の異常に悩まされていた。まず異常なほど高い体温。さっき測ったら３９度くらいあった。それと激しい頭痛。立ってたらクラクラするぐらい痛い。

「この家に睡眠薬ないの？」

『さぁ…？見たことないけど。』

「夕方はあんなに元気だったのに…。」

『たぶん血を吸ったからだろ。ってか少し静かにしろよ。一応俺だっておまえと同じ症状なんだからさ。』

確かに静かにしてた方がいいかもしれないけど…。こいつに言われるとなんだかムカつく！

午前０時

「この症状の原因って何なのよ！」

『知らない。ってか色々ありすぎて１つ１つ覚えてない。』

「はぁ…使えないわね。」

『使えなくて悪かったな！』

私の予想ではあの先生があやしいんだよね。だってあの先生私達のこと色々知りすぎでしょ！

午前１時

「…もう寝た？」

返事は返ってこなかった。

「ったく…。やることないじゃない！」

だったら寝ればいいじゃんって言われるかもしれないけど眠れないの！

「っていうか、私が起きててもアイツは寝られるんだ…。ずるっ！」

私は先に寝てしまった夜にさんざん愚痴をぶつけていた。

「はぁ…。気持ち悪い…。」

この熱気で着ていた下着は汗びっしょりになっていた。

「シャワーでも浴びよう…。」
そう思い立った私はフラフラとしながらもなんとかお風呂場までたどり着けた。私は汗臭くなった下着を脱ぎ捨てお風呂場に飛び込んだ。しかし、踏み込んだ先の足元には昨日使ったのであろうせっけんが落ちていた。

「え…？」

気付いた頃にはもう遅く、バランスを崩した私の体は後ろに傾いていた。思いっきり後頭部を床に打ち付けた私はそのまま意識を失った。

＞＞ピンポ～ン＜＜

「う…」
さむっ！
私が目を覚ました瞬間思ったことはこれだった。

このままシャワー浴びようかな…
立ち上がると打ち付けた後頭部がズキズキと痛んだ。それになんだか体も重いし…。

＞＞ピンポ～ン＜＜

「こんな朝早くから誰？…っていうか今何時？」
インターホンなんて完全に無視し、私は温かいシャワーを浴び始めた。

なんか違和感あるなぁ…。

そう思い自分の体を見下ろした。

「……え？」

昨日まではまったく自己主張していなかった体が今では凹凸のある魅力的なカーブを描いていた。

「これ…どういうこと…？」

＞＞ピンポ～ン、ピンポ～ン＜＜

『ったく！朝からうるさいな！』

「文句なら私に言わないでくれる？」

『…え～っと…あんただれ？』

もしかしてこいつ気付いてないの？そうとう変わっちゃったみたいね…。

（だれってあんたと身体を共有してるのって1人しかいないでしょ！）

『どう見たってアイツじゃないと思うんだけど…。』

こいつでもわからないほど変わったの！？

（って、あんたどこ見てんのよ！）

『おまえが見てる方向。』

（なんでそんなに冷静なのよ！）

『はぁ…？何を言いたいわけ？』

（ほんとになんとも思ってないのね…。）

ときどきこいつって何を考えてるのかわからなくなるのよね…。

＞＞…ピンポン、ピンポン…＜＜

『まぁあんたが誰だかは後回しにしてとりあえず出てきてくれない？さっきからうるさいんだよね。』

（だから私は純だって！）

『純…どっかで聞いたような名前だな…。』

（あんた私の名前覚えてなかったの！？）

『だからあんた誰だって言ってるだろ？』

あ～もう！こいつには何て言えばわかるのよ！

（…あんたにはいつも性悪女って言われてるわね…。）

『へぇ～。やっぱあんたはアイツだったのか。』

（知ってて聞いたの！？）

あぁ～！イライラする～！

私はとりあえずシャワーを止めお風呂場から出た。

「あぁ～！」

『どうかしたか？』

「服が…入らない…。」
私の急成長のせいで昨日まで着ることのできた服が着れなくなっていた。
『あ～…。上だけなら俺の使っていいけど…。』
「上だけじゃどうしようもないでしょ！」
＞＞ピンポン、ピンポン、ピンポン…＜＜
私たちがどうしようかと悩んでいる間にも迷惑な誰かさんは鳴らし続けていた。
「こんなときにいったい誰なのよ！？」
『とりあえず誰なのかだけ確認したらどう？まぁ…少し予想はつくけど。』
「教えなさいよ！」
『だから、自分で確認したら？』
「あぁ～もう！確かめればいいんでしょ！？確かめれば！」
私はとりあえずバスタオルを体に巻き、玄関へ向かった。
「…ってあの子じゃん！」
のぞき窓をのぞくと扉の先にいたのは愛美だった。
『アイツには前科があるからな…。』
「そういえばそうだったわね。」

『アイツならこの状況どうにかできるんじゃないの？』

「あぁ～！それいいかも！」

そうと決まれば時間もないしさっさと事情を説明しないとね。

私は玄関のカギを開け、勢いよく扉を開けた。

「やっと開けてくれたんです…か…？」

彼女の声は後にいくにつれてだんだんと小さくなっていった。

「連打するなんてなかなか非常識なのね。」

「すいませんでした！」

彼女は頭を深く下げていた。…ってなんで！？

「あの～…。夜くんと純ちゃんのお姉さんですか？」

「へ…？」

お姉さんって私そんなに変わったの！？まぁ確かに身長も伸びたしスタイルもよくなったみたいだけど…。

「あ～…。信じられないかもしれないけど、私は純なんだよね…。」

「はい…？」

彼女は少しの間固まっていたかと思うと、次の瞬間には私の顔をじーっと見つめていた。

「え～っと…とりあえず家に入らない？」

さすがにバスタオル巻いたまま外で立ち話はまずいし。

私が中へ入るようながすと彼女は黙って入っていった。

「で、信じてくれた？」
彼女をソファに座らせ私はそう切り出した。
「確かに顔立ちは純ちゃんそっくり…。でもそのスタイルは昨日とはほぼ真逆…。わかんないよ…。」
「やっぱり証拠は必要みたいね。……ほら、昨日の帰り際にした話覚えてる？夜が好きな理由についての。」
「！！あなた、純ちゃんなんだ…。」
「やっと信じてもらえたみたいね。」
「でもどうしてそんな体に…？」
「色々話さなきゃいけないこともあるんだけどとりあえず頼みを聞いてくれる？」
「うん、わかった。」
「愛美も見ての通り急にこんな体になっちゃったから着るものがなくなっちゃったのよ。そこであなたの力を借りたいんだけど、どう？」
「別に協力してあげてもいいよ。でも昨日はあんなこと言わされちゃったしなぁ…。」
「昨日のことは謝るから、ごめんなさい！」

「う～ん。それじゃぁ、私の言うことなんでも1つ聞いてね！」
「1つでいいのね。」
なんでもってイヤだなぁ…。だいたい私に拒否権ないし。
「今から予備の制服と下着持ってくるね！」
そう言って彼女は家を飛び出していった。
「はぁ～ぁ…。」
めんどくさい約束させられちゃったなぁ…。
『それよりアイツの家ってウチの近所なのか？』
「そんなこと私が知ってるわけないでしょ！」
『学校に間に合うのか？』
「今は…まだ7時だし大丈夫でしょ。」
って、7時に人の家に来るなんて常識なさすぎでしょ…。
「ただいま～！」
突然玄関の扉が開いたかと思うと、とても元気な声が聞こえてきた。
「…あなたどこに住んでるの？」
まだ5分くらいしかたってないんだけど…。
「え～っと…この家から見て右前かな？」
「…そんな近所だったんだ…。」

私あんまり近所付き合いしないからなぁ…。

「そんなことより、はい、これ！」

彼女は持ってきた大きな紙袋を私に手渡した。

「ありがと！」

私はその紙袋を持って2階の自分の部屋へ上っていった。

『アイツって同じ中学だったりするのかもな。』

「かもしれないわね。」

夜が話しかけてきたので適当に話をしながら私は紙袋から制服と下着を出していた。

「あんた見ないでよ！」

『それって俺に言うより自分の目を閉じれば済むことじゃないか？だいたいさっき…。』

「う、うるさい！！」

私はもっともなことを言われそうになったので話を遮り目を閉じてさっさと着替えにかかった。

『ところでさぁ、何が原因なんだろうな。』

「やっぱり一番怪しいのはあの先生だと思うんだけどね。」

『だよなぁ…。』

「それかあんたの暴走なのかもね。」

『はぁ…バンパイアかぁ…。』

「ほんと信じられないわね…。」

着替えが終わり下へ降りると愛美は家のキッチンに立っていた。

「あなたってもしかしてかなりの世話好き？」

「そんなことないよ～。」

「そうじゃないならなんで人の家で頼んでもいないのに料理作ってるわけ？」

「それはね～…」

彼女はそこまで言うと私の耳元でこうささやいた。

「純ちゃんに気に入ってもらえれば夜くんの情報もゲットできるじゃん！」

「コソコソ言ってもアイツには聞こえてると思うんだけど…。」

「あ…。」

はぁ…。この子ってかなりのおバカさんだったりする…？

「あ！今私のことバカにしたでしょ！？」

この子意外と鋭いわね。

「それよりご飯できたなら食べましょ。」

「話そらしたでしょ！？」

机の上には昨日と似た色とりどりの料理が広がっていた。
でも私、朝はパン派なんだよね…。
「そういえば服どうだった？」
「う～ん…。ちょっと胸が苦しいかなぁ…。」
「なにそれ～！昨日まではぺったんこだったのに！」
「別に胸なんてどうだっていいでしょ！」
「え～！女の子にはとっても重要なことだと思うよ！」
「もう！どっちでもいいでしょ！」
「どっちでもよくない！」
私たちは少しの間にらみあっていたが私はある用事を思い出したので時計を確認すると荷物を持って玄関の方へ向かった。
「もしかしてもう学校行くの？」
「いろいろと用があってね。あなたはどうする？」
「私はまだここに居ようかなぁ～って。」
「それならカギを渡しておくから戸締まりよろしく。」
カギって言っても夜のなんだけどね。
私は彼女の方に夜のカギを投げると学校に向かって歩き始めた。

変化（後書き）

夜「おまえなに人のカギを勝手に他人に渡してんだよ！」

純「いいでしょ？あんたのだし。」

愛「夜くんのカギをくれるなんてさすが純ちゃん！」

夜「あげてないから。」

純「それより私の大変身どう？」

夜「ん～…。普通にいいんじゃないの？」

愛「夜くんにほめられるなんて純ちゃんズルい！」

純「夜にほめられたって別にうれしくないのよ！」

夜「じゃあはじめから聞くなよ…。」

保健室のサキュバス

「…。それじゃ８時半ごろになったら先生のところに来てくださいです！」

「わかりました。」

私は今学校の職員室にいる。何故こんなに朝早くからこんなところにいるかと言うと先生の呼び出しがあったからだった。呼び出しって言っても何かしたわけじゃないけど。っていうか、今日が一応初登校だし。

「やっぱり保健室よね。」

職員室から出た私は言われた時間までの時間潰しに、というより用があったので保健室に向かうことにした。

「失礼しま～す。」

保健室に入るとあの先生は私を待っていたかのような様子でイスに座っていた。

「あら、早かったじゃない。」

「これってやっぱり先生の仕業ですね？」

「そうよ。嫌だった？」

「嫌ってわけじゃないんですけど…。ズルしてるみたいでなんていうか…。」

実際私は今の姿は嫌いじゃない。むしろ満足してるけど、この姿は先生によって創られたものであって私自身で得たものではない。

それがこのことを素直に喜べない理由だった。

「そんなこと気にしなくてもいいのよ。」

「どういうことですか？」

「だってあなたのその姿はあなたがもともとあるべき姿なんだから。」

「はい…？」

あるべき姿？なにそれ？

「つまりあなたが夜くんと同じ年齢すなわち１５歳に無事に成長していた場合の姿っていうことよ。」

「ってことは…これって本来の私？」

「私はあなたを本来の姿に戻す手伝いをしただけ。だから自分がズルをしたなんて思う必要はないのよ。」

「わかりました。先生、いろいろとありがとうございました！」

「ふ～ん…。純ちゃん、そういうお礼とか伝えるのは苦手じゃなかったっけ？」

「なんでそんなことを知ってるんですか？」

「あなたたちのことなら基本的になんでも知ってるわよ。」

「そういえば前にも私たちのこと知ってるみたいなことを言ってま

したよね？なんでですか？」

「実は私とあなたたちの両親は昔からの友人だったの。」

「両親を知ってるんですか？」

「あなたたちには両親の記憶がない、違う？」

「そうですけど…。」

「自分の両親のことを知りたいっていうのは当然よね。」

私は黙ってうなずいた。

「あなたたちの両親はあなたたちと同じようにバンパイアなのよ。それも私たち魔の者のトップを争うくらい優れていたのよ。」

「え…？先生も私たちと同じバンパイアみたいなもの何ですか？」

「あら、言ってなかったっけ？私はサキュバス。人の生命力を吸って生きる種族よ。ちなみに名前はルー・ソマリア。」

ルー・ソマリアって外国人？でもサキュバスって私と同じ魔の者みたいだし…。

「さっきのは本名ね。人間界では外国人として生活してるわ。」

「バレないんですか？」

「大丈夫よ。人間界での情報操作なんて私には楽勝だから。」

「情報操作って…。」

この人そんなことしてるって平気で言ってるし…。

「ところで私まだ朝食取ってないのよね。」

急に先生が今までとはぜんぜん関係のないことを言い出した。

「それがどうかしたんですか？」

「だからあなたから頂こうかと思うんだけど、どう思う？」

「嫌です。」

私は考える前に即答した。

「少しくらいいいじゃない。減るものじゃないでしょ？」

「絶対嫌です。」

私はこの先生の餌食になった愛美を思い出した。

絶対あんなことにはなりたくない！

「でも、いくら拒否しようと私もあなたたちが血を我慢できないように我慢できないのよね。」　先生はそう言った瞬間姿を消した。

「後ろよ。」

背後から声がしたと同時に背中を押され私は前にあったベッドに倒れ込んだ。

「ほら、もう諦めて大人しくしてちょうだい。」

先生に後ろからのしかかられて私は身動きが取れなくなっていた。

「大人しくやられるわけないでしょ！」

だいたいこんな人に私の初めてを奪われてたまるか！

そう思った瞬間、体がとても軽くなったように感じた。私は軽々と上にのし掛かっている先生を払いのけ、あっという間に保健室の外に出た。

「さすがバンパイア…。封印しきれていなかったみたいね。」

獲物を逃した先生はそうつぶやきながら純が出ていった扉の方を見つめていた。

保健室のサキュバス（後書き）

純「まったく…あの先生の前ではスキを見せたらだめね。」

愛「そうだよ！もし背後を取られたら…。」

夜「あの…。しがみつかないでくれる？」

純「でも、あの先生もきっと苦労してるんだよね。」

夜「俺たちと同じ魔の者だからだよな…。」

愛「え！？なに！？その魔の者って？」

純「愛美には関係ないから。」

夜「そう。おまえには関係ない。」

愛「なにそれ！わかった！みんなで私を仲間外れにしようと企んでるんでしょ！？」

純「あ～…はいはい…。そういうことでいいわよ。」

夜「ほんとこいつがバカで助かったよ…。」

愛「バカって言わないでよ！」

転校生？

「あ～もう！あの先生のせいでギリギリになっちゃったじゃない！」
私は現在全速力で廊下を走ってます。

『文句なら俺じゃなくてあの先生に言ってもらえるとうれしいんだけど。』

「今いないじゃない。」
私が職員室に着くと同時に目の前の扉が開いた。

「紅月さん！どこに行っていたんですかぁ！？」
そこには昨日までの私と同じくらいの背丈の子ども…じゃなくて先生が立っていた。

「ちょっと変な先生と色々あって…。」

「そうだったんですかぁ～。紅月さんも大変ですねぇ～。」

「それより今から教室に行くんですよね？」

「そうですよぉ～。紅月さんはいちおう転校生ってことになってるです。」
そう。私は何故か転校生ということになっていた。そりゃ1、2週間も欠席して入学式にも出なかったら少し変だと思うけど、転校生扱いにしなくても…。
朝から先生に呼び出されたのもこれを伝えるためだった。

「着きましたよぉ～。」

「1年D組…。」
どこかで聞いたような…。
「それでは先生は先に行くので呼ばれたら入ってきてくださいです。」
そう言うと先生は教室の中に入っていった。

「皆さ～ん、おはようございま～す！」
いつものように先生が元気に教室に入ってきた。まだ会ってからそんなに経ってないんだけどね。

「先生！転校生がウチに来るって本当ですか？」
ある男子が先生にそんな質問をした。
そういえば朝からそんな話題があがってたなぁ…。

「さすが男子諸君！そういう情報には敏感ですねぇ～！」

「先生！女ですか？それとも男ですか？」

「喜べ！男子諸君！転校生は女の子なのだ～！それも超カワイイんですよぉ～！でも～、このクラスの男子諸君にはもったいないので先生が頂いちゃいますです～！」

なんだか転校生の子かわいそう…。
先生の言っためちゃくちゃなことに対して男子は期待を抱きつつ先生にツッコミをいれていた。

「それでは先生の嫁の登場で～す！」

先生…色々間違ってるよ…。転校生そんな紹介されたらとっても出にくいじゃん…。

＞＞ガラガラ…＜＜

教室の扉が開きみんなが静まりかえった。

歩く度にサラサラとなびく真っ白の髪。吸い込まれそうになるほど澄んだ青色の目。整った体型には少し窮屈そうな制服。

え…？転校生って彼女！？

彼女は黒板に自分の名前を書き終えると、前を向き自己紹介を始めた。

「え～っと、名前は紅月　純です。よろしくお願いします。ちなみに先生の嫁ではないので。」

なんで純ちゃんが転校生としてここにいるの！？

「紅月さんの席は先生のそば…と言いたいところですが、みんなからのまがまがしい殺気を感じるのでやめておきます～。紅月さんはあそこの席を使ってくださいです～。」

先生の指差していた席に彼女が移動し始めると教室がザワザワとし始めた。

「それではみなさんも紅月さんと仲良くしてあげてくださいです～！」

先生はそう言い残して教室から出ていった。

「私に言いたいことがあるなら1人ずつ言ってもらえるとうれしいんだけど。」

私はそう言って男子女子に関わらず周りに集まってくるクラスメイトたちを一列に並べさせた。

『おまえよくやるよな…。』

質問に答え始めてから10分ほどの時間が経ったのにも関わらず列に並ぶ人数にあまり変化はなかった。それもそのはず質問をし終えた主に男子が何度も何度も列に並び質問を繰り返していたためにいつまで経っても終わらないのだった。

「みんな、そろそろやめてあげなよ。」

さすがに返答するのに疲れ始めたときに1人のクラスメイトが私に手を差しのべてくれた。するとタイミング良く授業開始のチャイムがなった。

「ありがと、愛美。」

「どういたしまして！」

私たちは一言交え、愛美は自分の席に戻っていった。

「意外といいところね。」

私は愛美を引き連れて夜がいつも行っていた屋上に来ていた。

「ここがいつも夜くんがいる場所なんだ～。」

そう言って愛美はメモをとっていた。

「夜が言うにはここにはあんまり人が来ないんだって。アイツの言ってたことだから確証はないけどね。」

そんなことを言っていると屋上の扉が急に開き男子が1人出てきた。

「やっぱりね。」

その男子は何かを探しているかのように辺りを見回していた。

『アイツどっかで見たような…。』

（ふ～ん…。知り合い？）

その男子がこちらに気付くと、あっと言う間に私たちの目の前までやって来た。

「はじめまして！俺、杉本　舜って言います！」

杉本という名前の男子は急に自己紹介を始めた。そのあまりに唐突なことに私は少し動揺していた。

「いや～。噂通りの美しさですね～。」

「純ちゃん！純ちゃん！」

１人で話を進めている杉本っていう人は放っておいて、私の名前をコソコソと呼んでいる愛美の方へ体を向けた。

「なに？」

「この人、入学式のときにも私のところに来てこんなこと言ってたんだよ。」

「ふ～ん…。つまり色んな女の子たちに声をかけて回ってるってことね。」

「しかもかなりしつこくてみんな迷惑してるみたいなんだ。」

「なるほどね。」

つまりこの人を少し痛い目にあわせればいいのかな？

「あっ！あなたは片岡　愛美さん！こんなところでこの学年トップクラスの美少女２人に出会えるだなんて俺って幸せものだなぁ！」

『そうだ！こいつ俺と同じクラスにいた変人だった。』

（そんなことは見ればわかるのよ！）

「ところで純さん。紅月　夜ってヤツ知ってますか？」

「誰？それ？」

不意にそんな質問をされたので少し焦って返答してしまった。

「ですよね～。もし関係があったなら俺はアイツを一生恨み続けるますからね～。」

「ところであなた色んな女の子たちに声をかけて回ってるそうじゃない？」

「俺のこと知ってくださっていたんですね！？」

（…こいつとは会話が成立しそうもないわね。）

『…変態だからな。』

「みんな迷惑してるらしいのよね。」

「迷惑してるっていうのは好きの裏返しですよ！」

この自分勝手な発言に私は我慢できなくなった。ゆっくりと立ち上がると、この自己中男子の腹めがけて後ろ回し蹴りを放った。男子は2、3メートルほど飛んでいった。

「すごーい！」

隣にいた愛美は感心した表情でこちらを見ていた。

「これに懲りたらもう女の子たちに手を出さないことね。」

そう言ってもといた場所に戻ろうとしたとたん、

「純さんの愛のムチなんて感激だぁぁぁ！」

後ろからわけのわからない叫び声が聞こえてきた。

（…こいつ懲りてない…。）

『…さすが変態…。』

私たちは心の中で驚き呆れていた。

「私…こいつ苦手…。」

「純ちゃんがそんなこと言うなんて…。明日は雪でも降るのかな…。」

「私だって苦手なものくらいあるわよ！」

そんなことを言っているうちに休み時間終了のチャイムが鳴ってしまっていた。

「とりあえず教室に戻った方がいいわね。」

私が屋上の扉の方へ向かって歩き出すと愛美もその後を追って歩き始めた。

「…で、あなたついて来ないでくれる？」

「そういうわけにはいきません！もし純さんや愛美さんが変なやつらに絡まれたらどうするんですか！」

「そんなやつ私がどうにかするわよ。」

「かよわいレディーにそんな危険なことはさせません！」

そのかよわいレディーに蹴っ飛ばされたのはどこのどいつよ！

そう心の中で叫びながら私は愛美の手をつかみ、この変態を振りきるために全力で走った。

「ちょっと待ってくださいよ～！」

走り去るその後ろ姿を追って変態と称された杉本はものすごい勢いで走り出した。

転校生？（後書き）

純「はぁ…。今回はさんざんだったわ。」

愛「ほんとあの人しつこすぎ。」

夜「俺もあそこまでおかしなヤツとは思ってなかった。」

純「何か対策でも考えないとね。」

愛「対策って言ったって、あの変態に効きそうなものってある？」

純「…」

杉「お～い、純さ～ん！こんなところにいたんですね！」

純「噂をすれば…。」

杉「純さん何か悩み事でもあるんですか？あるなら俺にドーンと相談してください！」

純「あんたのことよ！」

杉「俺に惚れちゃったとかですか！？」

純「…消えて。」

愛「純ちゃん任せたよ。」

夜「さて、俺たちは避難するか…。」

杉「避難？何のこと…ギャァァァー！！」

ショッピング地獄

「ちょっと買い物に付き合ってくれない？」

今日最後の授業が終わり、帰る準備をしていた愛美に話しかけた。

「何を買うの？」

「衣類全般と新しい制服の注文よ。」

例の大変身のせいで今の姿に合う服は愛美に借りているの以外にはなかった。

「そういうことなら任せて！」

「えらく気合い入ってるわね…。」

この気合いの意味はこのときの私には全くわかっていなかった。

「まずは制服の注文ね。」

私たちは学校の近所にある制服店へ向かった。

「いらっしゃいませ～！」

店の自動ドアが開くと元気のいい声が店内から聞こえてきた。

「本日はどのようなご用件でしょうか？」

「制服の注文を。」

「かしこまりました。少々お待ちください。」

そう言って店員さんは店の奥の方へ入っていった。

「それでは採寸をさせていただくのでこちらへどうぞ。」

「私も同行します！」

「はぁ！？」

急に愛美がとんでもないことを言い出した。

「愛美、どういうつもり？」

「だって興味深いじゃん！」

「だからって…。」

愛美ってもしかして意外と変人！？

そんなことを思っている内に愛美に引かれて店員さんについていっていた。

「ちょっと、どこまで脱がせるつもり！？上着脱いだからもうこれでいいでしょ！」

「純ちゃんは下着で押さえ付けてるんでしょ！だったら全部脱がなきゃダ…」

「うるさい！さっさと出ていきなさ～い！」

愛美…あなたも変態だったのね…。

邪魔者がいなくなると採寸はあっと言う間に終わった。

「それでは出来次第こちらから連絡させていただきますので。」

制服の注文は無事に終わり、次は家の近くのデパートに向かった。

「ねぇ、純ちゃん。無視しないでよ～！私が悪かったからさ～。」

「…」

さっきからこんな会話ばかりが続いていた。

「純ちゃ～ん…」

「もう、わかったわよ。そのかわり次はないからね。」

あまりにもしつこいのでとりあえず許してあげることにした。

「愛美、適当に似合いそうなもの持ってきてくれない？私こういうのあんまりわからなくて。」

「任せといて～！」

このとき愛美にこんなこと頼んでなければあんなことにはならなかったのに…。

「…一体何着持ってきたの？」

愛美のカートには大量の衣類が積み上げられていた。

「ほらほら～！ガンガン試着していってよ～！」

ここからが地獄の始まりだった。着ては脱いで、着ては脱いでのループが永遠と思えるくらい繰り返された。それなのにいっこうに減らない山積みにされた衣類。それどころかだんだんと増えていっている。

「純ちゃんって何着ても似合うよね～！」

「…」

もはや私は愛美の着せ替え人形になっていた。

「お願いだからもう帰ろう…。」

「だ～め！まだまだぁ～！」

「え…？」

「さぁ、次行くよ！」

「もう…無理…。」

私にはその先の記憶がなかった。気がついた時には自分の部屋のベッドの上に横たわっていた。次の日愛美に昨日のことを聞くと、

「純ちゃん、魂が抜けちゃってて家まで連れて帰るの大変だったんだから！あっ、あと昨日買ったのはちゃんとタンスにしまっといてあげたよ！」

などのことを言っていた。

（はぁ…トラウマになりそうだわ…。）

ショッピング地獄（後書き）

純「まったくひどい目に会ったわ…」

愛「だからごめんって言ってるじゃん！」

純「愛美には反省の色がないのよ！」

愛「反省してるってば～！だからまた一緒に行こうよ～！」

純「絶対イヤ！！」

愛「えぇ～！夜くんからも何か言ってあげて！」

夜「ん～…行ってやれば？」

純「ちょっと、夜！私がどんなに大変だったか知ってるでしょ！」

夜「服を着るのがそんなに大変なのか？」

純「問題はその量よ！」

夜「あ～…見てなかった。」

純「ふ～ん…見てなかったならしょうがないわね…」

夜「…またな！」

愛「あっ！夜くんが逃げた！」

純「愛美、あなたにも少し話があるんだけど？」

愛「え～っと…また今度じゃだめかな？」

純「だめ。」

忍び寄る闇

夜と入れ替わってから1週間ほど経ったある日。

「純ちゃん帰ろ〜！」

「そうね。大した用もないし。」

いつものように授業が終わり放課後を迎えていた。

「純さ〜ん！」

この邪魔なヤツにもある程度慣れてきていた。

「愛美、行くわよ。」

「は〜い！」

私たちは下駄箱に向かって歩き始めた。

「ちょ！俺は無視ですか！？」

「みんな〜！この人ストーカーだよ！」

愛美がそんなことを言ったとたんに男子たちの鋭い視（死）線が変態に突き刺さっていた。

「愛美さん、人聞きの悪いことを言わない…みなさんどうしてそんなに怖い顔をしているんですか？」

愛美が教室の扉を閉めたと同時に中から叫び声が聞こえた。
「なかなかやるわね。」
「ふふっ！どーんなもんだい！」
私も今度からそれ使おうかなぁ…。
そんなことを考えながら靴を履き替え学校の校門を出た。
「…ターゲット確認。追跡シマス。」
2人の姿を追う影には気づいていなかった。

「ねぇ、純ちゃん。」
「なに？」
「バンパイアがいるなら例えば狼男とかもいるのかな？」
愛美が突然妙なことを質問してきた。言われてみれば、そういう空想上の話に出てくる怪物が本当にいるかもしれない。具体例が私や夜とあの先生とかね。
「いるんじゃない？でも、急になんでそんなことを？」
「…こうして私みたいにそういう人に接してる人たちもいるのかな

ぁって思ってね。」

「…多分そういう人たちはそのことを隠して生活してるんじゃないの？」

「もしそれが本当なら私たちの周りにもいるってことなのかな？」

「かもね。」

そんな周りから見ればとても奇妙な話をしていると家の前まで来ていた。

「それじゃ～また明日！」

そう言うと愛美は向かい側にある自分の家に向かって走っていった。

「ただいま。」

って、誰もいないんだけどね…。

『誰かいたら逆に怖いって。』

「…」

最近コイツを無視し続けている。勉強のせいで。

『やっぱ無視？』

無視して欲しくなかったら少しは勉強しなさいよ。

そう思いながら勉強道具をリビングのテーブルの上に広げた。

＞＞ピンポーン＜＜

最近この音をよく聞くわね。愛美のがほとんどだけど。今回は彼女じゃないみたいね。

玄関の前まで行き扉に触れた。

「…なに…これ？」

『…殺気…』

扉の向こう側から恐ろしいまでの殺気を感じた。扉から離れようとしたとたん、爆音と共に扉が吹き飛んだ。私は吹き飛んだ扉の下敷きになり身動きが取れなくなっていた。

「ターゲット確認。捕獲シマス。」

部屋の中で無感情な声が聞こえてきた。

（なにこれ！？どういうこと！？）

『とにかく逃げろ！』

どうにか扉の下から抜け出すと目の前に黒いフードを被った小学生くらいの身長の人が立っていた。

【烈火】

フードの子が何かつぶやき小さな手をこちらに向けた。その手からサッカーボールほどの火の玉が現れ、まっすぐこちらに迫ってきていた。私は間一髪のところで左に避けた。火の玉はリビングのテーブルをいとも簡単に焼き払いその周りにあったものを焼きつくしていた。

（手から火の玉なんてどうなってるの！？）

『魔の者か…？』

（とにかく逃げないと…）

私はとりあえず家の奥の方へ逃げ込んだ。

【黒炎】

またフードの子が何かをつぶやいた。今度は私たちの周りを取り囲むように真っ黒い炎が現れ、完全に逃げ場がなくなってしまった。

【烈風】

フードの子がトドメとばかりにつぶやいた。急に私の周りで風が吹き始めたかと思うと、その風は刃物のように私の体を切り裂いていった。

風が止んだときには私は血まみれになり床にうつ伏せで倒れていた。

「ターゲット捕獲完了。」

そんなことをつぶやき私の体に手をのばしたそのとき、玄関の方から何かが凄い勢いで飛び込んできた。その何かはフードの子を吹き飛ばした。部屋の奥でガラスの割れる音がした。

「私のお姉さまをこんな目に合わせるなんて…覚悟はできていらっしゃる？」

その飛び込んできた何かは可愛らしい女の子だった。どうやらかなり怒っているみたいだけど…。

「異常事態発生。任務ヲ中止シ邪魔者ノ排除ニ移リマス。」

あの無感情な声が吹っ飛んでいった方から聞こえてきた。

「あなたのような操り人形に私を倒すことができるとお思い？」

女の子が自信たっぷりにそんなことを言っていた。

（やば…目の前がかすんできた…）

『この状況で気絶とかはけっこう危ないよな。』

（他人事みたいに言わないでよ…）

【烈火】

フードの子が再び手を前に突き出し何かを唱えた。

「一撃で決めさせていただきます。」

【五月雨】

次の瞬間、宙に浮く5本のナイフが現れ女の子の周りを飛び回り始めた。

「あなたは何本まで避けられます？」

周りを飛び回っていたナイフの1本がフードの子の放った火の玉を突き刺し跡形もなく消し去った。そのままナイフはフードの子めがけて飛んでいった。ズブッとフードの子の腹あたりにナイフは突き刺さりフードの子は動かなくなった。

「1本も避けられませんのね。まったく張り合いがありませんわ。」

スッと浮いていたナイフが消え、女の子は私の顔をのぞき込んだ。

「それにしてもお姉さま…美しくなられて…」

お姉さま…？この子もしかして勘違いしてる？

「お姉さま、何故不思議そうな顔をしていらっしゃるのです？」

見知らぬ誰かにお姉さまって呼ばれたら誰だってそうなるわよ！

「ぁ…」

声を出そうとしたが、やっとのことで1つの音をしぼりだすことしか出来なかった。

「ティア！間に合ったか？」

玄関の方から聞き覚えのある低く威厳のある声が聞こえてきた。

「おじさま、私は今イヴお姉さまとの１０年ぶりの感動的な再会を…」

感動的な再会ってどこを再会も何も初対面でしょ！

「結果報告！」

先ほどの低い声が響いてきた。

「…お姉さまの無事を確認！…そう堅物だと回りの方からも嫌われてしまっているのでしょう…」

彼女がボソッといやみをもらしていると、

「余計なことを言う前におまえの大事なお姉さまとやらの手当てをしてやったらどうだ？」

向こうから的確な指示がいやみ混じりで返ってきた。

「そうでした！早くお姉さまの手当てを…」

やっと手当てをする気になってくれたのね…。

「それにしても…その姿。もしかして誘っていらっしゃる？」

…危険な感じがする…。その姿ってだいたい私血まみれなんだけ

ど…。

「…お姉さま…。私もう我慢出来ませんの…。」

トロンとした危ない目でこちらを見つめていた女の子はいつの間にか私に覆い被っていた。

「お姉さまがいけないんですよ…。こんな甘い香りを発していらっしゃるから…。」

突然首もとにチクリとした痛みを感じ体の温かいもの、つまり血を吸われているのがわかった。

「ティア！何をしている！」

低い声で止めに入ってきたおじさんがチラリと見えたあと目の前が真っ暗になった。

忍び寄る闇（後書き）

ティア「はじめまして！」

純「何がはじめましてよ！」

ティア「お姉さま、怒らないでください。」

純「血を飲まれたのに怒らないわけないでしょ！」

ティア「怒ったお姉さまも…」

純「なに？その妖しい目つきは？」

ティア「何でもありませんわ。」

純「だったら近づいて来ないで。」

ティア「ティアはお姉さまとちょっとしたスキンシップをとりたいだけですよ？」

純「なんで私の周りには変態ばっかり集まるのよ…」

ティア「私はお姉さまのことを愛しているだけですよ？」

純「はぁ…自覚のない変態ってイヤ…」

ティア「お姉さまぁ～、逃げないでくださいよ～！」

再会（前書き）

《人物ファイル》

・名前

紅月　夜
あかつき　よう

・誕生日

7月11日

・血液型

不明（バンパイアであるため）

・趣味

特になし。強いて言えば屋上で流れる雲を見ること。

・特技

特技という特技はない。

・容姿

サラサラとしたウルフカットの黒髪、キリッとした顔立ち、そして海のように真っ青の瞳をしている。かなりのイケメン。

本小説の主人公の1人。何事にもあまり興味はなく、基本的にめんどくさいことは避けて通るタイプ。特に勉強、他人の心情を読み取ることは超苦手。典型的な鈍感ぶりを発揮する。

しかし、ときには鋭い洞察力を発揮し、普段からは考えられないようなことを言うことも…

再会

「…またここ？」

目が覚めたのは白いカーテンで仕切られた部屋。つまり保健室だった。前と違っていたのはおじさんにティアと呼ばれていた女の子が心配そうに私の顔を見つめていることだけだった。

「お姉さま！やっとお目覚めになったのですね！」

この子は私のことを姉だと思っているみたいね。それなら傷つけないないように…。

「私どのくらい寝てた？」

自然な会話になるように優しい感じで言ってみた。

「お姉さま…。１０年の間にこんなにも優しくなられて…。」

…また危ない雰囲気になってきた…

優しく言ったことを後悔しながら私は少し身構えて彼女の様子を見ていた。

「ティアの愛を受け取ってください！」

「はい、ストップ。」

その声の主は飛び込んできたティアの足首を掴んだ。足首を掴ま

れたティアはどうすることもできず頭から床に突っ込んだ。
「色々と厄介なことになってきたわね、純ちゃん。」
厄介なことには基本的に何らかの関係があるあの先生だった。
「ルー様、純って一体どなたのことを言っているのです？」
「イヴのことだ。」
ティアの質問には先生の隣にいたおじさんが答えた。
「久しぶりだな。」
たしか最後に会ったのは中学校の入学式のときだったっけ…
「悪いがあまり感傷に浸っている時間はないのでな、さっさと本題に入るぞ。」
そういえば物心ついたときからこの人に育ててもらってたんだっけ…
「まず今日おまえを襲ったフードのヤツことだ。」
フードの子によって傷つけられた体には小さな切り傷や火傷の痕しか残っていないことに気付いた。
「バンパイアのことはルーから聞いただろう？その傷痕もバンパイアの高い治癒力のおかげだ。」

人の心を読まないでよ…。まぁ、昔からこうだったけど…。

「悪かった。それであのフードがおまえを襲った理由なんだが、おまえがバンパイアだからなんだ。それもとても優れた血を受け継いだな。」

優れた血…？

「おまえの両親は実は…」

「この子達にはまだ早いわ。」

先生は急におじさんの話を遮った。

「つまりおまえの両親はとても優れたバンパイアだったということだ。」

何かごまかしてる…

どうせ今聞いても答えてはくれないと思った私はあえてそのことに突っ込まなかった。

「そのバンパイアの血に何か特別な価値があるの？」

「バンパイアの血はとても貴重なもので、その血は未知なる力を秘めていると言う。それゆえ高値で取引したりする奴がいるんだ。」

未知なる力…

「そしてその力は血が優れていればいるほど強力であると言われて

いる。」

だから私が…

それも気になっていたことの1つだったが私にはもう1つ気になることがあった。

「バンパイアだったからって言うのならどうして今まで襲われなかったの？」

「夜くんの暴走。」

質問には先生が答えた。

「夜くんの暴走によってかけられていた封印が完全に解けちゃったって言ったでしょ？その間のバンパイアの力を探知して家までたどり着いたのよ。それがたまたま今日だったからよ。」

「つまりもう私を追っている者はいないっていうことですか？」

「違うわ。今日送られてきた追っ手にはそれを操っていた主人がいる。つまりこれからも今日みたいなことは起こるってこと。」

「こんななことが度々起こるって危険ですよね？」

「だから彼を呼んだのよ。」

「余計なのもついてきてしまったが。」　そう言ってティアの方を見た。

「…お姉さまぁ～！」

ティアは私に泣きついてきた。

「イヴはおまえのことは覚えていないだろう。」

「そんなはずありませんわ！それなら先ほどのような自然な会話は出来ませんわ！」

会話っていうほどの会話じゃなかったって…

「そう思うなら本人に聞いてみればいいだろう。」

「…イヴお姉さまティアのこと覚えていらっしゃいますよね？」

これって正直に答えちゃっていいの？

「正直に答えてやった方がこいつのためだぞ。」

嘘ついてもしょうがないよね…

「ごめん…。覚えてないんだ…。」

「そんな…。」

ティアは保健室から走り去ってしまった。私はそのあとを追いかけようとしたが体に包帯を巻いているだけで何も着るものがなくどうすることもできなかった。

「着るものならこれ。」

先生が手渡したのはいつも着ている白衣だった。その白衣を羽織ると私は彼女を探しに保健室を後にした。

「あの子たちったらまだ話の途中なのにね。」

「まだ話す機会はあるだろう。」

『どこに行ったんだろうな。』

（へぇ～。あんたも人の心配なんてするんだ？）

『おまえと関係があるみたいな感じだしきっと俺とも関係があるんだろ？だったら俺だって少しくらい心配するっての。』

（ふ～ん…）

『何か文句でもあるか？』

（意外とそういうこと考えてるんだ。）

『意外ってどういうことだ？』

（てっきり他人の事なんてまるっきり興味なんてないと思ってた。）

『んなことより早く見つければ？』

（言われなくても探してるわよ！）

こういう時って意外と遠くには行ってないものなんだよね。

私は学校の階段を駆け足で上っていった。

「イヴ…お姉さまぁ…」

イヴお姉さまの記憶がなくなっていることぐらいは予想していましたが、いざ覚えていないと言われるとこんなにも悲しいことだとは思っていませんでした。正直もう何もかもがどうでもよくなってしまいました。

「やっぱりここね。」

この甘く優しい声は…

「お姉さま…？」

私の背後にいつの間にか愛しいお姉さまが立っていた。

「ごめんね、ティア。」

そう言うとお姉さまは私の背中を優しく包み込んでくれた。私の名前を知ってらしたのは少し私を驚かせましたが、お姉さまのことだからきっと会話から読み取ったのでしょう。その優しさが先ほどまでの悲しみを少しずつ和らげていった。

「…ねぇ、もう落ち着いた？」

「お姉さま、もう少し…」

もう少しってもう１０分ぐらいこの体勢なんだけど…

「もういいでしょ？」

そう言ってティアから離れた。

「お姉さまぁ～、もっとティアを慰めてくださいよぉ…」

こんなことになるならやらなきゃよかった…。っていうかさっきまでのあの表情はなんだったのよ！

「変なこと言ってないで戻るわよ。」

「待ってください、お姉さまぁ～！」

そんなこんなで保健室に戻ると真剣な表情のおじさんと先生が何かについて話していたようだった。

「おかえりなさい、純ちゃん、ティアちゃん。」

先生が優しい声でそう言って迎えた。

「それでは早くやるべきことをやってしまうぞ。とんだ邪魔が入っ

てしまったからな。」

真剣な表情のままおじさんはティアをチラリと見て言った。

（相変わらず言うことキツイなぁ…）

『まぁ、そういう人だろ。』

私の小学生のころのおじさんは今と同じような雰囲気でいつも厳しかった印象しか残っていなかった。

「先ほど話したおまえたちを狙う者から身を守るためのすべを教える。」

守るすべ…？

私はあの手から出る火の玉や5本の飛び回るナイフを思い出した。

「まずおまえの魔属性を理解せねばならん。その首から下げている首飾りを外せ。」

言われるがままにあの先生からもらった封印のペンダントを外した。すると今までゆっくり流れていたものが勢いよく全身を流れ始めたのを感じた。

「手を出してみろ。」

手を前に出すと無色透明の小石が手の上にのせられた。

「今から言うことを頭でイメージしてみろ。まずはその石が火で燃

えている状況からだ。」

石を燃やす？…真っ赤に燃え盛る火…

「ほう…。おまえのフォームはバーストのようだな。」

おじさんは私の手を見ながら言ったので手を見てみると、手のひらにあったはずの石がイメージしたのに似た火に包まれていた。

…バーストってなに？

「バーストとは簡単に言えば今日のあの使者のように自らの魔力を炎などの力に変換して放つことを言う。」

他にも違うのがあるのかな…。

「土台となるのは基本的にバーストとチャージだ。」

チャージ？

「自分の魔力を自身の体や持ち物などに流し込み、身体能力の向上や持ち物にエレメントと呼ばれる属性を付与することができるタイプのことだ。」

ふ～ん…

「そしてこの石の色はおまえの得意な属性を表しているのだが…。」

石の色は…

無色透明だった石は様々な色に変化し、１つの色にとどまることはなかった。

「おじさま、これって…」

「あぁ、エンチャントロードだ。基本的に我々魔族には扱えない属性があるが、全ての属性を使いこなすことができるごく少数の者のことをそう呼んでいる。」

ティアやおじさん、先生までもが驚いていた。そして何より私自信が一番驚いていた。

「しかしいくら全ての属性を扱えても使いこなせなければ意味がない。だから今からその訓練をしようというわけだ。」

「訓練ってどこで？」

そんないかにも怪しげなことを学校でやるわけにはいかないし…

「それなら心配ない。パラレルワールドや平行世界という言葉を聞いたことがあるだろう？」

「もう１つの世界とかいうやつ？」

「簡単に言えばそういうことだ。そして訓練する場所となるのがそれだ。」

「そんなわけのわからない世界にどうやって入るの？」

「入ると言うより作り出すと言った方がいいな。」

「つまりパラレルワールドを作り出してそこで訓練するってこと？」

「そういうことだ。理解できたならさっさと始めるぞ。」

【絶】

何か強大な力を感じた。

人の気配がない…

さっきまでグラウンドで聞こえていた部活動生の元気な声が聞こえてこなくなった。

「とりあえず外に出るぞ。」

おじさんは保健室から出ていった。

「お姉さま、行きましょう！」

ティアが私の手を引っ張って連れ出そうとした。

「引っ張らなくても行くってば！」

バランスを崩しながらも保健室の外に出た。

「エンチャントロードの訓練なんて面白そうじゃない！」

後ろからゆっくりと先生が歩き、保健室には誰もいなくなった。

再会（後書き）

純「魔力なんてほんと信じられないわ。」

ティア「お姉さまがエンチャントロードだなんて本当に驚きましたわ！」

純「エンチャントロードのすごさがイマイチわからないんだけど…」

ティア「後々わかっていきますわ！お姉さまなら必ずやそのお力を使いこなせるはずですもの！」

純「いや、プレッシャーになるからやめて。」

ティア「お姉さまは以前オリジナルの魔法などとおっしゃって魔法の開発をするほどすごかったんです！」

純「だからプレッシャーになるからやめてって…」

ティア「そういえば私がその魔法の練習台となることもしばしば…。あれ、とっても辛かったんですよ？」

純「…何て言うか…ごめん。」

ティア「ごめんで済んだら警察はいらないんですよ、お姉さま。」

純「…何を言いたいの？」

ティア「だから…、お姉さまの体で許してあげますわ！」

純「…ティア、あんたって昔からそういう感じだったの？」

ティア「もちろん昔からお姉さまのことを愛し続けておりました！」

純「昔の私も大変だったでしょうね！」

ティア「お姉さまぁ～、待ってくださ～い！」

血と怒り（前書き）

《人物ファイル》

・名前

紅月　純

あかつき　じゅん

・誕生日

7月11日

・血液型

不明

・趣味

読書、スポーツ、音楽鑑賞、可愛い生き物の観察。

・特技

夜を言い込め、自分の思うがままに行動させる。

・容姿

ツヤのある雪のように真っ白なロングヘア。スラリと伸びた鼻や、夜と同じ青色に透き通った瞳。可愛いと言うよりは美しいタイプ。

T（身長）　１６５
B（バスト）　８４
W（ウエスト）　５５
H（ヒップ）　８７

本作のもう1人の主人公。夜とは正反対の性格で、真面目で何事にも真剣に取り組む、特に夜にはとても厳しい。そして、かなりの負けず嫌い。意外にも可愛いもの、特に生き物が好きだったりする。

この章で、自分のことを見てくれていたことに気付き、単なる暇つぶしの相手だった夜のことを意識し始める。ただ、まだ自分ではその気持ちに気付いていない。

「ほら、夜！勉強しなさい！」

血と怒り

「で、何をすればいいの？」

「とりあえず自分の魔力の制御だな。」

おじさんは私の肩に手をおいてそう言った。

「今からおまえの体に魔力を流す。その魔力をコントロールできれば今回の訓練は終了だ。」

「おじさま、それなら私がやりますわ！」

「ティア…おまえに任せると色々と不安だ。」

ティアには悪いけど彼女に任せると私の身が危なそうだし…

「それでは始めるぞ。」

って、制御の方法とか教えてくれないの！？

「っ…！」

体に魔力と思われる強大な力が入ってくる。その力が元々体に流れていた魔力の流れに逆らい、魔力の流れを乱す。制御出来なくなった力が体の外に放出される。

「魔力の流れを操れ。」

操れって言われても…

でも入ってくる魔力に流れを乱されるのなら、自分の魔力で流れを整えることだって…

方法なんてわからなかったが体の感じるがままにやってみた。すると奇妙な感覚に襲われた。

こんな感覚昔味わったような気がする…

魔力の流れが安定し次々と送られてくる魔力のコントロールできてきているのを自分で感じた。

「昔の感覚が戻ってきたようだな。」

昔って子どもの頃からこんなことしてたのね…

「次はここのようなパラレルワールドを創る訓練だ。」

なんだかいきなり難易度上がった感じがするんだけど…

「とは言っても、パラレルワールド内でパラレルワールドを創ることはできない。」

できないならどうしろって言うのよ！

「このパラレルワールドを消去できればその逆に創ることもできるだろう。」

そんなものなの…？

「そんなものだ。まずは、この空間と現実世界との境界線を認識しろ。」

認識って言われたって…

精神を集中させて周りに気を配ってみると、学校の敷地内と外との間に妙な歪みがあることに気付いた。

「その境界線を消してしまえばこの空間は消える。」

ちゃんとやり方ぐらい教えて…

「軽く魔力を放出するだけでよい。」

周りを意識して、制御していた魔力を解き放った。すると、元気な部活動生の声が再び聞こえていた。

「よし。パラレルワールドについてはある程度できるようだな。ただし、他人の創ったパラレルワールドは基本的に本人以外は壊せない。そのことは覚えておけ。」

「はぁ…」

終わったとたんにどっと疲れが出てきてその場に座り込んでしまった。

「ほら、これを飲め。」

おじさんは私に真紅の液体が入った小瓶を渡された。

「人の血…？」

「あぁ、そうだ。」

人の血を飲むなんて…

いくら生きるためだとわかっていてもこれを飲む気にはなれなかった。これを飲めば私はもう愛美やクラスメイトと一緒にいることは出来なくなってしまうような気がした。

私は渡されたその小瓶を遠くに投げ捨てようとした。しかし、おじさんが私の手を掴みそれをさせなかった。

「飲まんと夜のようになるぞ！」

暴走…か…。暴走した方が気にしないで飲めるかな…。

「暴走して周りの人間に危害を加えたらどうするつもりだ！」

…そっか…

「わかったら飲め！」

それでも絶対イヤだ！

私は持てる限りの力を振り絞りその場から走って逃げようとした。

「今を逃れたとしてもいつしか通らなければならない道だぞ！」

そんなこと言われなくてもわかってる。わかってるけど…

「わかっているなら早く飲め。」

それでも私はそうしようとはしなかった。

「仕方がない少々手荒だが…」

【操術・体】

突然体が金縛りにあったかのように動かなくなった。

どうなってるの？

私の意に反して勝手に動く体。真紅の血の入った小瓶を再び受け取ると、そのふたを開け口の中に流し込んだ。

え…？そんな…

口の中に広がる生暖かい血。そんなものを少しでも美味しいと感じてしまう自分に腹が立った。そして目の前が真っ暗になっていく。正直そのまま目を覚まさなければいいのにとも思った。

自分の部屋か…

起きたと同時に頭の中に小さな泣き声が聞こえた。

（おまえ…）

『ほっといて…』

驚いた。コイツが泣くなんて思ってもみなかった。

すると、激しい怒りが腹の奥底からわいてきた。俺はアイツを探して1階のリビングへ降りた。

「お兄さま、お起きになったのですね！？」

確かティアってヤツだったな。悪いが今は相手をしている場合じゃない。

「お兄さま、何をお探しですか？」

何かを探しているのはすぐに気付かれた。

「アイツはどこに行った？」

「アイツ？…おじさまならつい先ほど急用だと言って出ていきましたよ。」

「…ふざけやがって！」

「どうなさったのですか、お兄さま？」

やりたい放題やって帰りやがって…

「もしかしてお兄さまはおじさまのなさったことに憤りを感じていらっしゃるのでは？」

「当たり前だ。」

『え？』

「おじさまの行動は少々強引でしたが、お姉さまのためには最善だったと私は思っていたのですが…」

「あれが最善…？」

その言葉を聞いたとたん、ティアにも怒りを感じた。

「あんな強引なやり方が最善？おまえもアイツのこと何にももわかってなかったんだな。」

『あんた何言って…』

正直俺だってアイツのことはよくわからない。けど…

「おまえたちは魔族の子どもとして1から育てられてきたかもしれない。だけど、アイツや俺はその事実を少し前に聞かされたばかりなんだ。それなのにいきなり狙われてるだの魔力だの挙げ句の果てには人の血を飲め？今まで人間として生きてきた俺たちに急にバンパイアとして生きろって？俺みたいな無神経なヤツだったらよかったけど、アイツはそんなに単純なヤツじゃないんだよ！」

目の前でそれを聞いていたティアの目からは涙がこぼれ落ちていた。

「ごめん、言い過ぎた。」

何故こんなにもムキになっていたんだろう…

「お姉さまぁ…」

ここは1人にしてやった方がよさそうだな…

再び自分の部屋に戻りベッドの上に横になった。

『どうして？』

不意にアイツが話しかけてきた。

『ねぇ、どうして私のためにあんなことを…』

（おまえのため？俺はただムカついたから言っただけなんだけど。）

『…ありがとう。』

（ん？何が？）

『まったく…よくわかってるんだか鈍感なんだか…』

（…？）

コイツが何を言っているのか全く理解できずそのまま寝てしまった。

血と怒り（後書き）

《人物ファイル》

・名前

片岡　愛美

かたおか　えみ

・誕生日

1月10日

・血液型

A型

・趣味

夜の追っかけ、服のコーディネート、買い物。

・特技

五感をフルに使って夜を見つける、他人の服のコーディネート。

・容姿

肩ほどまである黒のカールしたミディアムヘア。くりっと丸い目に栗色の瞳。カワイイ系。

T　１５５
B　８１
W　５８
H　８４

少し天然の入ったカワイイ系の女の子。自分勝手なところもあるが、持ち前の可愛さで基本的に男子からは許してもらえる。
襲われていたところを夜に助けられた。そのときに一目惚れしてしまい、今では夜に猛烈アタックしているが、全く相手にしてもらえない。

「夜くんは絶対誰にも渡さないよ！！」

妹（前書き）

《人物ファイル》

・名前

杉本　舜

すぎもと　しゅん

・誕生日

8月31日

・血液型

B型

・趣味

ナンパ、覗き、可愛い娘に関するその他もろもろ。

・特技

可愛い娘に関する情報を誰よりも速く細かく調べる。

・容姿

どこにでもいそうなチャラチャラした茶色に染められた髪、鋭い目付きは完全なる不良を思わせる。

夜のクラスメイト。外見は結構カッコイイ部類に入るが、誰に対しても馴れ馴れしく、特に可愛い女の子に対してはストーカーのような行動を取ることで、大抵の女子には避けられ、男子には夜以外の友達はいない。そのため、夜目当てでやってきた女子を狙っているが、逆に夜が近くにいることでどうしても女子は夜の方に気がいってしまってあまり効果は見られていない。その夜にも友達として見てもらっているのかは不明。

「ねぇ、君可愛いね！一緒にお茶しない？…え？ダメ？そんなこと言わないでさ～！」

妹

「ここどこだ？」

見渡す限り真っ白に広がる殺風景な空間。

「父さん！遊ぼう！」

そんな中にふっと４、５歳くらいの男の子が現れてそんなことを何もない方向に向かって言った。

「ノア、ちょっと父さんは忙しいんだ。ロイド！」

さっきと同様に今度は２０代半ばくらいの男性が現れた。どうやら親子みたいだった。

「ただいま参りました。」

次に現れた男性には見覚えがあった。俺たちがおじと呼んでいる人だった。見た目はほとんど今と変わっていなかった。

「悪いがノアと遊んでやってくれないか？」

「かしこまりました。」

あのおじが頭を下げるくらいなんだからあの男性は相当偉い人なんだろう。

「ほら、ノア行っておいで。」

「うん…」

その男の子はなんだか寂しそうにしておじに着いていった。

「お…さま！…て…さい！」

誰か聞き覚えのある声によって目を覚ました。

「やっと起きたんですね？」

目の前にティアの顔があった。

「…今何時？」

「6時ですよ。」

…早すぎる。俺がいつも起きてるのは学校に間に合うギリギリの8時ぐらいなんだけど…

「お兄さま、何ですか？その何で起こしたんだ的な目は？」

表情に出てたか…

「それよりお兄さま昨日はお姉さまの気持ちも考えず申し訳ありませんでした！」

ティアはそう言って深々と頭を下げた。

「まぁ、気にするな。だいたいそういうのは本人に言った方がいいんじゃない？」

ティアの頭にポンと手を置いて、そのままティアを部屋に残して下に降りた。

「そういえばお兄さまに渡さなくてはいけないものが…」

上から後を追って降りてきたティアが玄関の端に置かれたものを引きずって持ってきた。

「おじさまが言うにはお父様からの贈り物らしいですけど…。重たいですわ。」

ティアが持ってきたのは鞘に納まった刀のようなものだった。見た目はそんなに重そうには見えないんだけど…

「これって刀か？」

「それ以外の何がありますの？」

物騒な世の中だな…

あまりにも重そうにしているので手伝おうと刀に手をかけた。

「え？」

ティアが驚いたような声を出した。

「普通に軽い…」

刀はさっきまでのティアの頑張りが無駄だったと言わんばかりに軽く持ち上がった。

「この刀はお兄さまにしか使いこなせないみたいですわね。」

ためしに刀を抜いてみるとその刀にはあるはずの身がなかった。

「なんだこれ？」

「これは多分お兄さまの魔力によって力を発揮する刀のようですね。」

また魔力か…

「俺はまだ魔力の制御習ってないしな…」

「軽くやってみます？」

ティアは少し嬉しそうにそう言った。

「お兄さま、準備はよろしいですか？」

ティアはやるとも言っていないのにもう俺の手を掴んでやる気満々だった。

「はいはい…」

「それではいきます！」

魔力が体内に入ってきているのがわかった。
確か入ってくる魔力の流れを整えればいいはずなんだけど…
正直整えようとすると逆に流れが乱れているような気がした。
「お兄さま？一体何をなさっているんですか？」
「いや、俺の場合何もしない方が逆に安定するみたいでさ。」
「そんなはずは…。」
ティアは少しの間俺の体内に色々な方向に魔力を流し、何かを調べているようだった。
「お兄さまの魔力の流れに規則性がありませんわ！」
「どういう意味？」
「普通は魔力は常に一定方向にしか流れないんですが、お兄さまの場合その方向がなく、流されている魔力によって変化しているんです！」
「ふ～ん…」
イマイチ意味がわからない。
「とりあえずさ、朝ごはん食べよう。」

朝ごはんの用意を始めても、ティアは俺の観察のようなことを続けていた。

「ところで学校どうすんの？」

この状況を打開しようとそんな平凡な質問をした。

「学校…そういえばおじさまがそんなこと言ってましたわ。確かお兄さまの学校の中等部らしいですけれど。」

「ふ～ん…。中等部なんてあったのか…」

「ところでお兄さま。学校って何をするところなんですか？」

「…は？」

今なんて言ったんだ？

「お兄さま？」

「あ～、勉強するところらしいけど…」

俺はまともにやってないしな…

「勉強…ですか。勉強ならおじさまから習いましたわ。」

あの人勉強もできるのか…

「勉強ってどんな辺りまで？」

「確かフェルマーの最終定理を終えたところでした。」

（フェルマーの最終定理ってなんだ…？）

『数学の最難題クラスの証明らしいけど…』

…学校行かなくていいだろ。

＞＞ピンポーン＜＜

そうこうしている内に7時になっていた。

「お兄さま、私が出てきます！」

そう言ってティアは玄関の方へ歩いていった。

って、アイツが出たらダメだろ！

時既に遅し。もうティアは扉を開けてしまっていた。

「純ちゃ～ん！…ってあれ？」

「どなた？」

「おまえが出たってどうしようもないだろ？」

「あっ！夜くん！」

愛美はこちらに気付いたようでまっすぐに指差してきた。

人を指差すなよ…

「あれ？でもまだ2週間経ってないよね？」

「…まぁ、そんなわけで。」

起こったことをある程度話し終わる頃には学校の近くまで来ていた。もちろんアイツが人の血を飲んだことは話していない。

「ところでお兄さま、私まだこの方のことを教えてもらっていないのですが。」

「あ～、コイツはただの知り合い。」

「夜くん！知り合いなんて生ぬるいものじゃないよ！」

全力で否定された…

「なるほど。お兄さまの知り合いなんですね。」

「だから知り合いじゃ…」

「名前は何というのです？」

話を遮られた愛美は少し面白くなさそうな顔をした。

「愛美。」

「愛美様ですね？」

「様かぁ…。悪い気しないなぁ！」

そういえばコイツって無駄に敬語使うよな…

「それじゃあ、あなたの名前は？」

「紅月　瑠璃（るり）ですわ。」

ふ～ん…。偽名だよな、たぶん。あれ？だったら俺の今の名前も偽名なのか？

「ところで瑠璃ちゃんも夜くん狙ってる？」

狙う？俺の命狙われてるのか？

「残念ながら私はお姉さましか眼中にありませんの。お兄さまはお姉さまの次ですわ。」

「え？お姉さんってたぶん純ちゃんのことだよね？」

「そうですがなにかあります？」

「いえ、なにも！」

「ところで中等部ってどこ？」

話しているうちに学校に着いた。

「グラウンドを挟んで高校の向かい側ですわ。」

へぇ～。あれって中等部の建物だったんだな。

「私はここで。お兄さま、また帰りにお迎えに参ります。愛美様も。」

「うん！学校がんばってね～！」

ティアは中等部の校舎のある方向へ歩いていった。

「ねぇ、夜くん。…夜くん？って、いない！」

「1週間ぶりに来たっていうのにいきなり追っかけられるとは…」

「やっぱりここに来たか！」

屋上の俺の定位置のわきに隠れていたのであろう杉本が現れた。

「おまえ、一体どういうことだよ！」

「なにが？」

「とぼけるなよ！」

何のことを言いたいんだコイツは？

「おまえ、愛美さんに加えもう1人めちゃくちゃ可愛い子連れてたじゃないかよ！」

「…言いたいことはそれだけか？」

「それ以外に何がある！」

俺、こんなに呆れたのは初めてかも。

「あの子誰なんだよ。」

「紹介してくれよ～。」

「モテない俺に救いを～！」

コイツ、うるさいな。

俺は珍しくコイツの質問から逃れるためだけに今日1日の全ての授業を受けた。もちろん聞いてはいなかったが。

「紅月！明日のスポーツテストは参加しないと体育の単位足りなくなるぞ。」

帰る間際に先生に言われた。

「先生、単位はテストで点数取ったらいいっていうはなしじゃ…」

「紅月、おまえ体育のペーパーテストなんてあると思っているのか？」

そうだった。体育には実技テストしかなかった。

「お兄さま～、帰りましょう！」

声の先には予想通りティアがいた。

高校の校舎に入ってくるなよ…

「めちゃくちゃ可愛いじゃん、あの子。」

「紅月の妹か。」

「さすが兄妹だよな。」

この雰囲気は…めんどくさいことになる前にさっさと帰った方がいいな…

「ティア、帰るぞ。」

「お兄さま、ここでは瑠璃と呼んでください。」

まったくややこしいよな…

俺たちは騒ぎが大きくなる前に何とか校門を出ることができ、そのまま家に向かって帰った。

妹（後書き）

ティア「お姉さまぁ～！」

純「ちょっ！引っ付いてこないで！」

ティア「少しくらいいいじゃありませんか～。」

純「キャッ！どこ触ってんのよ！」

ティア「あらあら、可愛い声をお出しになって…」

純「あんたたち見てないで助けなさいよ！」

愛「人の恋路にちょっかい出したらダメだよね～？」

杉「いやぁ～。眼福眼福～！」

純「夜！助けなさいよ！」

夜「しょうがない…。……？」

純「ちょっと、どうしたのよ！？」

ティア「魔力で壁を作っておきましたわ！」

夜「だってさ」

純「…ティア？いい加減にしとかないと…」

ティア「えへへ…。怒ったお姉さまも魅力的ですわ！」

純「…」

愛「よ、夜くん！あっちにいこ！」

夜「そ、そうだな！」

杉「2人ともこんなに素敵な光景を見ないなんてどうかしてるぜ！」

純「さて…覚悟はいい…？」

スポーツテスト（前書き）

《人物ファイル》

・名前

ティア・ルーン

紅月　瑠璃

あかつき　るり

・誕生日

１０月４日

・血液型

不明

・趣味

姉の観賞、姉とのスキンシップ

・特技

無音追尾（主にこっそり姉に近付く用）、幻術（戦闘用）

・容姿

夜や純と同じ青い瞳に、肩ほどまでの真っ赤な髪を青いリボンで留めている。同じ歳の人と比べて少し発育不良なのがコンプレックスとなっている。

T　147
B　73
W　54
H　74

夜、純と血の繋がった妹。あるきっかけで純と夜に恋してしまう。本人曰く、夜よりも純の方が数倍好きらしいが、夜が好きではないというわけでもなく、ましてや他の人には興味すら示さないらしい。

また、夜や純と違って魔界で育ってきたので、魔力や魔族のことにも詳しく、両親から受け継いだ優れた能力から魔族の間でも有名である。ただ、その分人間界のことには疎い。

「百合？いいえ、私はお姉さまが好きなだけですわ！……シスコン？それを言うならブラコンでもありますわね。」

スポーツテスト

「一緒に甲子園を目指さないか！？」
「君の華麗なシュートでキーパーを翻弄してみないか？」
「ウチでダンクを量産してくれよ！」

あ～、いつもの数倍もめんどくさいことになったな…

さかのぼること、今日の朝。

（スポーツテストで最高点を取れば授業受けなくても済むか？）

『スポーツテストで最高点！？そんなことできるならやってみたら？だいたいそんなことしてどうなっても知らないわよ。』

このときの俺にはコイツの言っている意味がわかっていなかった。

（スポーツテストって何をするんだ？）

『先生の話を聞いてなかったの？』

（…寝てた。）

『まったく…。種目は５０ｍ走、持久走、ハンドボール投げ、長座体前屈、上体起こし、立ち幅跳び、握力、反復横跳び。各種目、測定した数値によって１０段階で得点化されて、最終的にその各種目

の段階を足し合わせた数値によって今の技能がわかるってわけ。』

（へぇ～。色々とめんどくさいな。）

うちの班はまず体育館で測定を行っている握力からやることになっていた。

これって全力でやったら測定器ぶっこわれそうだな…

とりあえず測定器の最大測定値を越えないよう、そして１０段階に届くように調整した。

「紅月すげー！」

「左右両方７０ｋｇ前後だぜ！」

次は上体起こしか…

「紅月やろーぜ！」

上体起こしか…。まぁ、３０秒間に４５回くらいできれば大丈夫か。

「よーい、はじめ！」

「紅月…おまえそんなに体育好きだったのか？」

軽く４５回できた。逆に最後の方は数あわせのためにゆっくりやる余裕も残せた。

「おーし！俺もおまえみたいに…」

「…３０回。なんなんだこの差はあぁ～！」

次は反復横跳びと…

３０秒間に８０回やれば十分か…。床で滑らないように気を付けなきゃな…。

「紅月…おまえスポーツ選手になれ！」

次は長座体前屈と…

この種目は他の種目と違って、始める前に柔軟をしておけば記録がかなり伸びるんだよな。

「うわ～…紅月の体柔らかすぎだろ…」

次はグラウンドで立ち幅跳びっと…

これは余裕だろうな…。転ばない限り。

「なぁ…紅月。おまえだけ走り幅跳びってことはないよな。」

次はハンドボール投げっと…

このハンドボールってイマイチ手に合わないんだけど…。まぁ、力で投げるなら関係ないか。

「そのボールを投げたら記録が劇的に伸びたりするか！？」

次は５０ｍ走っと…

５０ｍか…。スタートダッシュ苦手なんだよな…。

「あれ？紅月ってスタートダッシュ苦手じゃなかったっけ？」

「バカ！アイツの苦手と俺たちの言ってる苦手とは次元が違うんだよ！」

ラストが持久走っと…

何周走ったか覚えとかなきゃな。

「うわ！アイツ、スタート早々ダッシュしてるぜ！」

「あれじゃ絶対もたねーだろ！」

「俺らまだ3周残ってるのに…」

「…」

よし！オール１０段階！これで体育の授業受けなくてもＯＫかな？

「なぁ、君！野球部に入らないか！？」
「いや、ぜひともサッカー部に！」
「ここはバスケ部に！」

各運動部の部長と思われる人たちの勧誘が始まった。

さて、この状況をどうやって打開しようか…。コイツらは部活動の勧誘に来てるんだから…

「もう部活決めてるんで…」

「「「どこ！？」」」

ヤバイ…。もっとめんどくさいことになってしまった。

部に入る気なんてさらさらなかった。しかしこうなってしまった以上は入らなきゃダメだよなぁ…。

『どうするの？』

（…）

『だからどうなっても知らないって言ったのに。』

（あぁ～！あれはそういう意味だったのか！）

『今頃気付いたの！？』

（そういうのってハッキリ言ってくれよ。）

『で、どこにするの？』

（ん～…）

『はぁ…。どうせやるんだったら自分のためになるとこにすれば？』

（自分のためかぁ…）

周りをぐるっと見回して自分のためになりそうな部を探した。

部活で少しは魔族に襲われても対処できるようになるか…？

（なぁ…剣道ってどうかな？）

『やりたいものをやればいいじゃない。』

あれ？この学校って剣道部あったっけ？

「この学校に剣道部ってある？」

「剣道部？確か剣道場で活動やってるらしいけど。あそこはあんまり部員いないし入るなら俺たちの部活の方がいいぜ！」

剣道場ねぇ…。どこだ？

「それじゃ！」

小さなすき間を通ってどうにか勧誘軍団を脱け出した。

スポーツテスト（後書き）

純「だから、どうなっても知らないって言ったのに。」

夜「回りくどい言い方するなよ…」

純「そんなことにも気をかけないあんたが悪いの！」

ティア「お姉さま、お兄さまにそんな先のことを見通すことなんてできると思っていますの？」

純「…無理ね。」

ティア「でしたら、優しく教えて差し上げることも大切だと思いますわ。」

純「う～ん、そうね…」

夜「おまえらな…」

ティア「そして、私ももっとお姉さまに優しくしてもらいたいですわ！」

純「無理ね。」

ティア「おね～さまぁ～…」

夜「…俺がいる意味もなさそうだな…」

部活！（前書き）

《人物ファイル》

・名前

ルー・ソマリア

・誕生日

１２月１１日

・血液型

不明

・趣味

様々なことに対する研究、夜や純にちょっかいを出すこと。

・特技

魔具（魔力によって動く道具）の開発、怪我や病気の治療。

・容姿

黒色の大きな瞳に、ショートカットのサラサラした黒髪。その魅惑的なスタイルで生徒からの人気も高いらしい。

T　172
B　91
W　56
H　93

サキュバスの医師でもあり発明家でもある。元々は夜や純を見守るのが仕事であったが、最近ではティアに立ち位置を奪われてしまっている。しかし、その医師としてや研究者として魔界ではとても有名で、魔界からの来訪者もときどきいるほどである。

部活！

「なぁ、剣道場ってどこだ？」

不本意だが情報豊富な杉本に聞いてみた。

「剣道場？あの女の子のこと教えてくれたらいいぞ！」

交換条件か…。悪い、ティア！

「アイツは俺の妹。」

「おまえに妹いたのか！？」

「さっさと剣道場の場所教えろ。」

「剣道場は体育館の裏にあるけどそんなことよりもっと情報を…」

情報を聞いたらコイツに用なんてないし…

俺は杉本のことは完全に無視してその体育館の裏に向かった。

（へぇ～、ここか。）

『なんていうか…えらく新築ね。』

体育館の裏には明らかに最近建てたのであろうピカピカの木造建築物があった。

そっと扉を開けると3人の道着をきた人たちが練習していた。

（ふ～ん…。剣道ってあんな風にやるんだな…）

『知らなかったの…？』

しばらく観察していると、1人がこちらに気付いた。

「先輩、誰か来ましたよ。」

声からすると男みたいだ。

「あら、お客さまかしら？」

えらくスローペースなしゃべり方だな…

1人が面を脱ぎ、もう1人の部員に話しかけていた。

「誰？何の用？」

凛とした声が響いてきた。どうやら今ここには男子1人、女子2人いるらしい。

「ここって剣道部？」

『ちょっと！あんた敬語っていうものを知らないの！？』

「そうだが、まずは私の質問に答えてもらおうか。」

コイツが部長かな？

「1年の紅月。剣道部の見学にちょっと来ただけだけど。」

「おまえ、1年のくせに先輩に向かってタメ口を…」

「林、少し静かにしていろ。紅月、見学だけでなく私と一戦交えないか？」

「別にいいけど。俺、ルールとかわからないぞ。」

「ルールは後から説明する。剣道着は向こうから借りてくればいいだろう。」

部長らしき人が指差す方へ行くと竹刀やら防具やら色々と置いてある中に剣道着がキチンとたたまれて置かれていた。

「よし、それでは始めよう。ルールは先に有効打を与えた方の勝ちだ。」

何とか着替えて出てくるやいなや部長らしき人がルールの説明をした。

「負けなしの部長ならあんな無礼なヤツ簡単にやっつけちゃいますよね？」

「そうね～。でも油断大敵ね～。」

へぇ～。この人って強いのか。

「どこからでもかかって来い。」

どこからでもって言われたって…

剣道のことなど分からない俺は軽く牽制を入れることにした。

「もう少しやる気を出せ！」

牽制は軽くあしらわれ、相手はそのままカウンターを放ってきた。

「へぇ～。なかなかやるじゃないか。」

カウンターを受け流し、一度距離をおいた。

「普通に戦っても勝てないようだな。」

そんなこと一回の打ち合いでわかるものなのか…？

部長らしき人は竹刀を右手から左手に持ちかえた。

「へぇ～。左利きだったんだ。」

「右手で十分だと思ったのだが思った以上だった。」

へぇ～。なめられてたってことか…

『そりゃ、急に道場破りみたいな奴が来たらまずは実力を確かめるでしょ。それにしてもそれで利き手と逆の手を使う方がどうかと思うけど…』

「どのくらい楽しませてくれるか…」

部長らしき人がものすごい速さでこちらに迫ってきた。

「はあぁぁ〜！」

力一杯振り下ろされた竹刀を左に避けると、相手の胴を狙って竹刀を振った。しかし、その攻撃も受け止められると、相手の猛攻が始まった。

「紅月、防戦一方じゃ勝てないぞ！」

「俺も少し真剣にやろうかな。」

相手の竹刀が振り上げられた瞬間を見計らって、目に見えないほどのスピードで相手の後ろに回り込んだ。

「なっ…！」

「後ろからの攻撃って避けられる？」

そのまま軽く竹刀を相手の頭の上にちょこんと当てた。

「あの部長が負けた？…ってか、今アイツは何をしたんだ？」

「2人ともお疲れさま〜。」

1人の部員は呆然とし、もう1人の部員は勝敗など気にしていない様子でお茶を運んできた。

「紅月、おまえの名前は？」

唐突にそんなことを聞いてきた。

「夜だけど？」

「夜！私と結婚を前提にお付き合いしてください！」

「はい…？」

結婚…？

お付き合い…？

…もしかして告白？

「部長！？」

「あらあら、唯ったら…」

「どっちなんだ、夜？」

情報を処理している間に部長らしき人が詰め寄ってきていた。

「え～っと…」

逃げたい…

しかし、制服は部室に置きっぱなしで、剣道着を着て逃げるわけにもいかない。

「ちょっと着替えて…」

「どうなんだ！？」

どちらか言うしかなさそうだ…

「ごめん、おまえのことイマイチわかんないからさ。」

「フラれた…」

一瞬悲しんでいるように見えた。

「しかし、私は諦めんぞ～！」

次の瞬間には復活していた。

「唯、がんばって～！」

いや…この人、応援しないでほしい…

とりあえずこの人たちはほっといて制服に着替えた。

「おまえ、すげーな！」

後ろを向くと男子部員がいた。

「剣道部に入部すんの？」

「そのつもりだけど？」

「俺、1年C組の林　真吾。よろしくな、夜！」

「あぁ、よろしく。」

真吾と握手を交わした。

「俺、部長のあんな姿初めて見たわ！いつもはクールな人だったのに、おまえに負けたとたんああなったからマジで驚いたよ。」

「へぇ～…」

コイツはかなりいいヤツみたいだ。

「ところで、頼みがあるんだけどさ～。部長と付き合ってあげてくれないか？」

「は…？」

あまりにも突然に奇妙な頼みをしてきたので焦った。

「ほら、部長ってさっき言った通り超クールな人で、多分恋とかしたの初めてだと思うんだ。」

「で、なんでおまえが頼むんだ？」

「いや、やっぱり部長には幸せになってもらいたいっていうかなんていうか…」

わけわかんないな…

『ほんとあんたって鈍感ね。』

（はぁ…。いたのか。）

『こんなに面白い話があるのにじっとしてるのはバカよ。』

（…なにが面白い？）

『この林って人は、ほんとは部長に恋をしてるの。でも、その部長に好きな人ができてしまった。だから、部長の幸せのために自分は身を退いてその好きな人を部長と結びつけようと努力しているの。』

（ふ～ん…）

その話を聞いたとき俺はコイツにあることを言いたくなった。

「おまえって部長のことが好きなんだろ？」

「いや違う！断じて違う！だいたいそんなわけ…」

「それならいいけど。でも、見守ってるだけじゃ気持ちは伝わらないんじゃないか？」

そう言い残し部室から出た。

「夜！やっぱり私はおまえのことが忘れられないんだ！付き合ってくれ！」

「忘れるってまだ３０分も経ってないのに忘れられる方がすごいって。」

「２度目の敗北…。しかし、私は諦めないっ！」

「あ！俺、入部する予定なんでよろしく！」

「私のために入部…」

「いや、違うけど。」

そう言って剣道場を出た。

ん…？

剣道場を出ると3人の女の子が見学をしていたようだった。向こうはこちらに気付くと足早に逃げていった。

ティアと同じ制服だし中等部の生徒かな…

そういや、ティアいないな。いつもは放課後すぐにうちのクラスまで来るんだけど…

「お兄さまぁ～！」

噂をすれば…

「どこにいらしたんです？」

「そこ。」

剣道場を指差した。

「お兄さま、剣道をおやりになるんですか？」

「一応今日見学してきた。」

「なるほど…」

ティアが何やら考え込んでいると、

「紅月さ～ん！私たちの部活に入って～！」

女子の群れがこちらに迫ってきていた。

「お兄さま、逃げましょう！」

「あぁ。」

ティア…おまえも苦労してるんだな…

そんなことを思いながら学校をあとにした。

部活！（後書き）

愛「夜くんが道場破りしたってほんと？」

夜「ただ見学に行っただけなんだけど。」

純「見学でいきなりそこの部長を倒すって、完全に道場破りでしょ！」

愛「えぇ～！？あの生徒会長を倒したの！？」

夜「生徒会長？」

純「部長のことでしょ。」

夜「あぁ、あの人か。勝ったけど？」

愛「なんでそんなに当たり前みたいに言えるの？あの会長、去年は全国大会まで言ったって話なのに。」

夜「だって俺バンパイアだし。」

愛「あぁ～…。ところでバンパイアが大会に出るのってズルくない？」

純「言われてみれば…」

夜「じゃあ、辞めるか。」

愛「え！？」

純「コイツにそんなこと言ったら即辞めるわよ。」

夜「じゃあ、退部届け出してくる。」

愛「ちょ、ちょっと待った～！」

輝石と魔刀（前書き）

《人物ファイル》

・名前

林　真吾

・誕生日

4月9日

・血液型

A型

・趣味

剣道

・特技

特技と言えるほどのものはない。

・容姿

高校生らしい黒の落ち着いた髪型。顔は中の上ほど。

夜や純と同級生の剣道部員。神宮高校の中等部からエスカレーター式で上がり、その頃から剣道部に所属していた。そして、剣道部の部長に恋をするが、部長と自分は釣り合わないと感じながらも彼女のことを想い続け今に至る。

輝石と魔刀

「なぁ、俺もアイツが受けた魔属性とか何やらを調べたり、魔力を操る練習とかってしなきゃいけないわけ？」

「もちろんです！」

「あ～、やっぱそうだよな。」

めんどくさい…。だいたいあれ疲れるんだろ？

「夜く～ん！」

アイツか…

「夜くん、今日は帰りが遅かったね。なんで？」

帰りってなんだよ…。だいたい俺がどこで何しててもいいだろ。

「ねぇ～、夜くんってば！」

「愛美様、愛する方のことを全て知りたいと思う気持ちはわかりますが、やり過ぎれば嫌われてしまいますわ。」

「さすが恋の伝道師瑠璃ちゃん！」

何を言ってるのかさっぱりだ…。それに、いつの間にこんなに仲良くなってたんだ？

「お兄さまは剣道部の見学に行ってらしたんですわ。」

「剣道部…？あぁ～、あの美人の生徒会長がいるところか～！」

剣道部＝生徒会長ってわけか…。なんていうか残念な部活だな。

「まさか夜くん生徒会長目当てで…」

「お兄さまに限ってそんなことはありえませんわ！たぶんお兄さまのことですから、生徒会長がいらっしゃったということすら知らなかったでしょう。」

言われた通りすぎて何も言うことがないな…

「夜くんは剣道部に入るの？」

特に言うこともなく、黙ってうなずいた。

「じゃあ私も！」

「…はい？」

最近色々と驚かされてばっかりな気がするな…。耐性つけないとなぁ…

「あ、でも私運動音痴だからマネージャーってことでね！」

マネージャー…。うん、いなかったような気がする。

「まぁ、いいんじゃない？」

「早速明日入部届けを出してこよう！」
見学はしないんだな…
「それじゃ、また明日！」
愛美はこちらに手を振りながら自分の家に向かって歩いていった。
その後、夕御飯を食べ終えすることがなくボーっとしていると、
「お兄さま、練習しましょう！」
「なんの？」
ティアが呆れた目で俺を見る。
「え～っと…。あぁ、魔力のヤツね。」
やっとのことで思い出した。
「お兄さま、もう少ししっかりしてください。」
はいはい…ごめんごめん…
「お兄さま、始めますわ。」
あのときの無色透明な小石を手に置かれた。

「お兄さま、燃える小石を想像してみてください。」

燃える小石…

イメージはしてみたがアイツのように上手くはいかなかった。

「それでは、次は石に魔力を注入するように。」

注入…？わけわかんないけどやってみるか…

しばらく何も起こらない状況が続いていた。

「お兄さま、今日はそろそろおやめに…」

「いやだ。」

やっとわかってきたところなんだからさ。

さっきまでは石にばかり集中しすぎてたんだ。石に魔力を注入するすなわち体から魔力を石に流し込めばいいだけってことか。

すると、石が急に輝き出した。

「何ですの…これ？」

石は純白の光を発するとともに真っ赤に光り輝いていた。

「こんなの初めて見ましたわ…」

なんかキレイだな…

「…私にわかるのは、お兄さまはお姉さまと違い、チャージタイプで炎系の魔術が得意ということぐらいですわ。」

そのだけのことがわかれば十分いいんじゃないか…？

「お兄さま、まだ魔力は残っていますか？」

「まだまだ大丈夫だ。」

体感としては、まったく魔力が消費されたような感じはしなかった。

「昨日から気になっていたのですが、やはりあの刀は魔具のようでしたの。」

「魔具？」

「今小石にしたように魔力を流し込むと使えるようになる道具のことですわ。」

そんなことを昨日言ってたな…

「ちょっとその刀に魔力を流し込んで頂けませんか？」

柄しかない刀を手にし、さっきの要領で魔力を流し入れた。すると、さっきまでなかったはずの刀の身が現れた。

「こんな風になってるんですね。」

魔力の流す量を少なくすると短刀ほどのものになり、より多くすると太刀ほどのものにもなった。

「へぇ～。おもしろいな。」

「面白いからってむやみにお使いになってはいけませんわ。」

「わかってるって。」

「おっしゃってることとやってることが違うように思いますが。」

ティアの話など半分以上聞いておらず、魔力の流し方によって変わる刀を見て楽しんでいた。

「お兄さま、私はもう寝ますわ。」

呆れたティアは先に2階へ上がっていった。

『あんた、いつまでやってんのよ？』

（疲れるまで…？）

『ほんと、何がしたいのよ…』

最終的に俺は5時間ほどこの刀と戯れていた。

輝石と魔刀（後書き）

夜「最近思ったんだけど、なんでおまえってそんなしゃべり方してるんだ？」

ティア「そんなといいますと？」

愛「自覚ないの！？」

純「その敬語のことよ。」

ティア「あぁ、このことでしたのですね？」

愛「そう！その原因は？」

ティア「…原因と言われましても、この話し方がただしっくりくるだけなのですが…」

純「しっくりくるって…」

愛「でもまぁ、ティアちゃんらしいよね。」

ティア「私らしいですか？でも、昔はお姉さまもこんな感じでしたわ。」

純「え！？私もこんな感じで話してたの？」

ティア「はい！もしかすると、私はお姉さまに影響されてこうなったのかもしれませんわ。」

純「私！？」

ティア「はい！お姉さまは幼い頃、私以上に気品に満ちた言葉遣いをしていたんですの！」

愛「へぇ…でも、純ちゃんならそれはそれでありなような気がするよ！」

純「私がそんな話し方をしてたなんて…」

夜「…ありえそうな気もするな。」

愛「夜くんに言われたら決定的だね！」

純「そう言う夜はどうだったのよ？」

ティア「お兄さまですか…今とあまり変わりありませんでしたね。…というよりも、昔の方が慎み深かったような気がします。」

愛「夜くんが慎み深い…」

純「…想像できない…」

夜「悪かったな。」

ご褒美と2回目

「はぁ～…」

…朝からため息なんて幸せが逃げるな…

あれから1週間毎日あの刀に魔力を流し込んでいたので、さすがに疲労がたまっていた。

「夜くん、一緒にお昼食べよ！」

「いや、夜は私とだ！」

もっともほとんどコイツらのせいだけど。

「会長は2年生なのに何で1年の教室に来てるんですか！？」

ほんと、何しに来てるのやら…

「それはだな、私と夜との愛を深めるためだ！」

「ふ～ん…」

「会長のアタックじゃ華麗にスルーされますよ！ここは私の…」

だいたい、毎日毎日おんなじようなやりとりをして飽きないのか…？

「夜、いいな～！」

「だったら代わってくれ。」

「いや、ダメだ！俺なんかが代わったら潰される！」

潰される？…この2人ならやりかねないかもな。

「お兄さま！」

ややこしいときにまたややこしいのが来た…

「何ですか、その何で来たんだよコイツ的な目は？」

…俺って目に出るタイプなのか？

「そんなタイプありませんわ！それより…」

ティアは俺の耳元に口を近付け、コソッと何かを言った。

「マジ？」

「はい。」

前に襲ってきたフードの仲間がこの学校に近づいてきているらしい。

「どうするんだよ？」

「とりあえず…」

「ちょっと、瑠璃ちゃん！」

「いくら妹と言えどもそんなに夜の近くで話すことは許さないぞ！」

少しくらい静かにできないのか…？

そんなことを思いながら2人を見る。すると、2人とも急に黙りこんだ。

あれ？どうしたんだ？

「お兄さま、ナイスですわ！」

「で、どうするんだ？」

「とりあえず、向こうの動きを様子見したいと思ってますの。そこでお兄さまとテレパシーが使える方が楽だと思いますので…」

ティアは俺の手を握った。

「ん？テレパシーってどうするんだ？」

「お兄さまの魔力を私に流し込んでください。私はお兄さまに流し込むので。」

「あぁ、わかった。」

ティアの魔力が流れてくるのがわかると、俺も魔力を流し始めた。

「…おまえ、大丈夫か？」

魔力を流し始めると、ティアが妙に辛そうにしているように見えた。

「お兄さま…もう、結構です…」

途切れ途切れにそう言うので、流すのをやめた。

「ほんとに大丈夫か？」

「お兄さまの魔力が体の中で…」

そんなに流したつもりはなかったんだけどな…

「それと顔が赤いぞ。」

「はっ！私としたことがお姉さまというものがありながら…」

また意味の分からないことを…

「ねぇ…お二人さん…」

「さっきから人前でイチャイチャして…」

「私たちのことなんか全く気に止めてないんでしょ…？」

後ろから真っ黒なオーラを放った愛美と部長が目の前に迫ってくる…

（ティア！逃げるぞ！）

早速テレパシーを使うことになるなんてな…

『お兄さま…私まだ動けそうにありませんわ…』

（…わかった。）

ティアの足の下に手を通し、背中に手をかけることでティアを持ち上げた。

「お姫様だっこ…」

「夜…私にはやってくれないのに…」

それがかえって彼女たちを怒らせてしまつた。

『お兄さま…。なかなか大胆ですわ…。』

ティアがなんだか熱っぽい視線を送ってきていた。

「な～に、2人で見つめ合っちゃったりしてるの～…」

「夜、見せつけているのか…？」

2人は脅威的なスピードで俺たちの周りを取り囲んだ。

コイツらほんとに人間…？

諦めてティアを降ろした。

（…ティア、コイツらから逃げ出すのは無理みたいだ…）

『お兄さま、がんばってください…』

何をがんばれって言うんだよ…

ティアは鬼と化した愛美の方へ歩いていった。

…スルー！？

どうやら俺しか見えていないようだった。

うぅ…。気分が悪い…。

結局弁当を2つ食べさせられただけだった。とは言っても、いわゆる『あ～ん』とか言うやつで。周りは好奇と殺意のこもった目でこっちを見てたけど…

「夜！部活に行くついでに付き合ってください！」

「いや、ついでじゃないし。」

「くっ…諦めない…」

ほんとこの人何考えてんだろう…

「夜くん！部活行こっ！」

あのめんどくさい昼飯の後から妙に機嫌が良くなっている。

「行くか…」

俺と愛美が歩き出すと、落ち込んでいた部長はすぐに着いてきた。

「夜！私とまた勝負しよう！」

「はいはい…」

「もちろん、私が勝ったら付き合ってもらうけどな！」

「やっぱやめとく。」

そう言って剣道場の倉庫に入った。なぜ倉庫なのかというと、この剣道部には部室が1つしかなく男子部員は2人しかいないので、俺たちは倉庫で着替えているからだった。

倉庫内に入ると、真吾が先に着替えていた。

「お、夜じゃん！」

俺以外の誰がここに来るんだよ…

「俺決めた！部長に告白するってさ！」

俺に言ってどうするんだろう…

「まぁ、がんばれ。」

とりあえずエールを送っておいた。

うまくいけば追っかけ回されることも少なくなるかもしれないし。

「ところで告白ってどんな感じでしたらいいと思う？」

知るかよ…

そのあとしばらく告白のアドバイスを求められたが全て適当に流しておいた。

『お兄さま！聞こえます？』

ちょうど倉庫から出ると同時にティアの声が聞こえてきた。

（ん？どうした？）

『朝に申し上げた追っ手がどうやらお兄さまの居場所を突き止めたようで、今そちらに向かっているようです。』

（それって結構ヤバくないか？）

『それについては【絶】を使いますので大丈夫ですわ。私がそちらに今向かっているので少しの間待っていて下さいますか？』

（あぁ、わかった。）

さて、待っとけったってこっちから行った方が早く落ち合えそうだしな。

そう思った俺はティアの言っていたことなど気にしないで、道着

のまま剣道場を出た。

「あっ！」

外に出ると最近よく見る中等部の女子がいた。

「見学なら入れば？」

「あ…失礼します！」

そう言って逃げていく。いつものパターンだ。ってか、何しに来てるんだろう？

そう思いながら周りを見渡していると、上空から何かを感じ取った。

（それらしきもの見つけたぞ。）

見上げると、前に見たフードを被ったヤツがいた。

『その場でじっとしていてと申し上げたのに…』

（ところでそろそろ着きそうか？）

『はい！もう目の前まで来てますわ！』

校舎の方を見ると、人では到底あり得ないようなスピードでこっちに走っている…というよりは飛んでいるティアを見つけた。

（…おまえ、止まれるよな？）

『はい！お兄さまを使って。』

（…）

ドスッ…！

「…止まる気なかったろ？」

「そんなことありませんわ。」

「だったらなんで魔力使わなかったんだよ。」

「私とお兄さまとのスキンシップのためですわ！」

スキンシップ…

「だいたいおまえはお姉さまとやらを愛してたんじゃないのか？」

「もちろんそうですわ！ただし、お兄さまもお姉さまと同じくらい好きになってしまいましたわ！」

「…さっさとあの魔族片付けてくれよ…」

「はい！わかりましたわ、お兄さまっ！」

意味のわからない満面の笑みを浮かべてティアは俺から離れた。

【絶】

ティアが目を閉じ魔力を集中すると、あっという間に周りには俺とティアと追っ手の3人だけになっていた。

「お兄さま！あの魔族を倒したらご褒美頂けます？」

ティアがこっちを向いたと思ったら、そんなことを言い始めた。

「ってか、ご褒美って？」

「そうですわね～…キスかハグするっていうのはどうです？」

「却下！」

ってか、その2択両方ともおかしいだろ…

「それではお兄さまにお任せしますわ！」

最終的に俺任せなのか…

「期待してますわ！お兄さま！」

期待しないでくれよ…

ティアは追っ手の方へさっきのさらに倍以上のスピードで突っ込んでいった。

【魔障壁】

追っ手の周りに見えない魔力の壁ができ、ティアの攻撃を受け止めようとした。しかし、ティアの蹴りはいとも容易く魔力の壁を破

り、追っ手を真下に蹴落としていた。

「そんなことで私に勝てると思って？」

地面に叩きつけられた追っ手はなんとかまだ動けるらしく、ヨロヨロと立ち上がった。

「報告シマス」

急に追っ手がそんなことをつぶやき始めた。

「そうはさせませんわ！」

ティアが空中で弧を描くように体を回転させ、追っ手めがけてまっすぐ落下した。

「障害、ティア・ル…」

【氷花】

ティアの手から現れた巨大な氷の柱が追っ手を貫いた。

「ふぅ…なんとか間に合いましたわ。」

戦いを終えたティアがこちらに降りてきた。

…俺の気のせいか？

氷の柱の刺さった追っ手の体にまだごく微量の魔力が流れているのを感じた。

「…システム…ソン…ショウ…ジ…バクモード…移行…」

自爆！？

「ティア！！」

【爆炎魔破】

この１週間でティアから習ったチャージを使う。足にできるだけ多くの魔力を流し込み、思いっきり地面を蹴った。

ものすごい爆音と共に強い熱風と衝撃によって俺たちは吹き飛ばされた。

「お、お兄さま…？」

「…いってぇー！」

身体中に痛みが走った。

「あ、あの…お兄さま…？」

「ん…？」

「あの…た、体勢が…」

ちょうど俺がティアを押し倒したような体勢になっていた。

「あ、悪い！」

すぐさま体を起こそうとしたが、ティアが首に腕を絡めてそれをさせなかった。

「お兄さま、約束のキスを…」

「してないっての！」

しかし、予想以上にティアの腕の力は強く、脱け出すことができなかった。

「お兄さま！頭を動かさないで下さい！」

「動かさなきゃよけられないだろ！」

さっきからこのやりとりが続いていた。

「もういい加減諦めろって！」

俺がそう言って、この場をどうにかしようとしたがティアは全く気にしていない。

「えっ！？」

急に後ろから声が聞こえてきた。すかさず声の主を探すと、1人の女子が顔を真っ赤にしてこちらを見ていた。

たしか…コイツは…

見覚えのある可愛い顔だったので少し思い出してみた。

そうだ！剣道部を見学してた女子だ！

「お兄さま！隙ありっ！」

「んっ！？」

しまった！油断してた。

気付いた頃にはもう遅く、俺の唇はティアによって奪われていた。

あれ？俺ってファーストもセカンドも奪われてないか？

「お兄さまの唇を頂きましたわ！」

「離せ。」

「お兄さま！ご褒美ありがとうございます！」

勝手に奪ったんだろ！

体を起こし、俺たちの様子を全て見ていた女子の方をチラリと伺うと、

「あっ！し、し、失礼しましたっ！」

めちゃくちゃ慌てて逃げていってしまった。

「そういえば…あの方…」

ティアが何か考え事をしているような顔をしていると思ったら、次の瞬間には何かを思い付いたように怪しい笑みを浮かべていた。

ご褒美と2回目（後書き）

愛「ティアちゃんは純ちゃんが好きだったんじゃなかったの？」

ティア「もちろん、お姉さまのことは好きですわ！」

愛「それなら、私の夜くんに手を出さないでよ～！」

ティア「そういうわけにはいきませんわ！」

純「一応その理由とやらを聞かせてもらおうかしら…」

ティア「それはもちろん、お姉さまもお兄さまも好きだからに決まっていますわ！」

夜&純「はぁ…」

愛「ティアちゃん…二人とも呆れちゃってるよ。それに、二股なんて非道徳的だよ！」

ティア「魔界では二股なんてよくあることですわ。それどころか、一夫多妻なんてこともあるくらいです！」

夜&純&愛「…」

新入部員の受難（前書き）

《魔術ファイル》

【烈火】

属性：火

単体の対象へ向けて火球を放射する。使用魔力によって火球の大きさが変化するため、魔力を費やすことで複数の対象を巻き込むこともできるが、単純な魔法であるため威力は高くはない。

【黒炎】

属性：火・闇

攻撃対象を中心に漆黒の炎を放出する範囲魔術。相手の視界を奪う効果もある。単純な魔術の中では少ない範囲魔術であるため使用者は多い。

【烈風】

属性：風

風の刃で対象を切り裂く単体魔術。当たりどころによってダメージが変化するので安定しない。そのため、使用者も少ない。

【五月雨】

属性：無

ティアのオリジナルの魔術。５本のナイフを空中に浮かべ自由自在に操る。

【操術・体】

属性：幻

対象の行動をコントロールすることができる。ただし、対象と使用者との実力差が大きい場合発動せず、魔術自体も複雑なので使える者はあまりいない。

【絶】

属性：幻

使用者を中心に広範囲に渡ってパラレルワールドを形成する。現在世界に影響を与えることがないので使用者の多い魔術の１つ。

【氷花】

属性：氷

巨大な氷柱を地面から発生させ、対象を貫く。

【爆炎魔破】

属性：火

全魔力を消費して使用者を中心とした大爆発を起こす自爆魔術。使用者の魔力によって威力が著しく変化するが、使用すればほぼ確実に絶命するので使用者は皆無。

新入部員の受難

「…どうして私が剣道部に入らなきゃいけないのよ？」

夜のセカンドキスが奪われたその日、夜は人の血を飲んで私と入れ替わった。夜は大した抵抗もなく血を飲んだみたいだった。そして、次の日の今日、突然の愛美からの勧誘。

「このままじゃ剣道部人数が足りなくて廃部になっちゃうんだって！だから、入って！」

そういえば、剣道部のマネージャーだったっけ…

「強引過ぎない？」

「あれ～？純ちゃん、忘れちゃったの～？」

「何を？」

「ほら～、前に純ちゃんが人形みたいにカワイイ女の子から今のパーフェクトボディに大変身したことがあったでしょ～？」

「あのときはかなり焦ったわね。」

っていうか、私をどんな風に見てたのよ…

「それで、何か思い出した？」

思い出した？って言われても…

あの日は確か…。お風呂の中で倒れて…、起きたら急成長してて…、…夜に見られて…、愛美が訪ねてきて…、服を借りたんだったっけ…。

「もしかして…」

「思い出してくれた？あのとき私の言うこと何でも１つだけ聞いてくれるって言ったでしょ？」

…すっかり忘れてたわ。

「もちろん断ったりしないよね～？」

「…しょうがないわね！やればいいんでしょ！やれば！」

「やった～！早速今から部員集めだよ！」

「あと何人必要なの？」

「え～っと…最低２人だね～。」

「まぁ、１人ならどうにかなりそうね。」

「え？なんで？」

時間的にもうそろそろ…

「お姉さまぁ～！！」

ほら、来た…

「なるほどね～！」

「何がなるほどなんですの？」

「ちょっと頼みがあるんだけど。」

そう言うと、急にティアの目が爛々と輝き出した。

「お姉さまからの頼みだなんて…。私、一肌でも二肌でも脱がせていただきますわ！そして、そのまま全裸になってお姉さまとの楽しい一時を…」

「そこまでしなくていいから。」

ほんとティアってあらゆる意味で危ないわね…

「で、その頼みっていうのが、剣道部への入部なんだけど。」

「剣道部…。お姉さまもお入りになるのですか？」

「入りたくはないけど入らなきゃいけなくなったのよ。」

「でしたら私も入ります！というより、入るなと言われても入ります！」

なにそのやる気…

「これであと1人ね。」

「あと1人って、何のことですの？」
「実はね、あと1人部員を集めないと廃部になっちゃうんだ…」
「なるほど…」
ティアは少し考え込むと、何かを思いついたようで、意地の悪い笑みを浮かべていた。
「そのことなら私に任せて欲しいのですわ！」
「…一体何を企んでいるのかしら？」
「あら、お姉さま。私別に何も企んでなんていませんわ！」
絶対嘘だ…
「それじゃあ、あと1人は瑠璃ちゃんに任せたよ！」
「無理矢理はダメだからね…」
「心配ご無用ですわ！」
めちゃくちゃ心配なんだけど…
「純ちゃん、剣道場行こっ！」
ほんと任せて大丈夫…？

そんな不安に関わらず、私は愛美に手を引かれて行った。

「ぶちょ～！2人ゲットしてきましたよ～！」

そんなハイテンションな愛美に連れられて、剣道場の中に入ると、夜にしつこく付きまとう部長と、おっとりとした女の先輩、それに部長に恋してる男子部員が、何やら一ヶ所に集まっていた。

「よくやった、愛美！」

部長がとても嬉しそうに愛美に駆け寄り、次に私を見た。

「名前は？」

そう聞いている間にもまっすぐに目を見つめられていた。

「紅月　純です。」

名前を聞いたとたん、目付きの悪い部長が私の心の中を探るようにさらに鋭く見つめてきた。

「…夜の親族か？」

あまりにも唐突にそんなことを言われ、私はこれ以上ないくらいに焦った。

「いえ、そんなことは…」

言った後にしまったと思った。

「嘘をつかなくてもいい。」

やっぱり気付かれた。

「夜のことを知らないのであれば、急に聞かれて、誰のことかと尋ねるより先に親族ではないと否定する可能性は低い。それに、そんな珍しい苗字の者がこの学校の剣道部に集うというのも不自然だ。」

この人、なかなか鋭いわ…

「そして、その青い瞳。私が夜の親族ではないかと疑うことになった原因だ。」

瞳…。そういえば夜も青かったっけ…？

「で、夜とどういう関係だ？」

どういうって言われても…

「…いとこです。」

妥当なところを言ってみた。

「まぁ、そう言うならそういうことにしといてやろう。」

…バレてる。

「ぶ、部長！は、話はこのくらいにして練習しましょう！練習！」

うわぁ～…愛美、焦ってるのバレバレでしょ…

「練習の前にあいつらにも自己紹介してきな。」

部長の指差す先には、まったりとお茶をすする女の先輩と、彼女に話しかける男の同級生がいた。

「私は桐原（きりはら）　秋（あき）、よろしくね～。」

「俺、林　真吾、よろしく！」

ゆっくりと自己紹介をする桐原先輩。その横で落ち着きのない林くん。

完全に対照的なんだけど…

「今日は夜はどうしたのか知ってるか？」

質問したいのが抑えきれなくなったのか、林くんが夜のことを尋ねてきた。

「夜？夜なら用事で海外だけど。」

「マジで！？」

…私、最近嘘ついてばっかりかも…

「何の用事なんだ？」

「おじの仕事の手伝いよ。」
「おじの仕事って大変なのか？」
「ん～…公にはできないわね。」
「なんかすげーな…」
「自己紹介も終わったところで早速実力を試してみたい。」
部長が戻ってくると、いきなりの提案が飛び出した。
「…と、言いたいところだが、あいにく部員集めが終わっていない。ということで、今から部員集めを…」
部長がそこまで言うと、外から話し声が聞こえた。１つは、いつもしつこく付きまとってくるティアのもの。もう１つのは、以前どこかで聞いたことのある女性の声。
「瑠璃！確かに剣道部には興味あるって言ったけど、こんな急には…」
「今日思い立ったことは、今日やるのが一番ですわ！」
…ティア、私の言ったこと聞いてたのかしら？
「お姉さまぁ～！！１人連れて参りましたわ！」
扉が勢いよく開くと、真っ赤な髪をなびかせながらティアがこち

らに向かってくるのが見えた。

「あの2人で部員集め完了ですよ、部長！」

愛美が嬉しそうにそう言った。

「お姉さま、褒めてください！」

近くまで来たティアはそう言った。

「褒める？瑠璃、アンタ私の言ったこと聞いてたのかしら？」

ティアに手を掴まれている女子生徒を見ると、彼女は剣道部の練習をよく見に来ていた子でもあり、夜とティアのキス現場を目撃した子でもあった。

「彼女は私のクラスメイトの桜乃（さくらの）　憂希（ゆうき）さんですわ。剣道部に興味があるとのことでしたのでここまで連れて参りましたの。」

「アンタのは連れてくるんじゃなくて、強制連行でしょ！」

「どうとらえるかはその人次第ですわ。」

「桜乃さん、ごめんね。」

ティアのことは放っておき、とりあえず連れてこられた彼女の方に専念した。

「先輩、謝らないでください！確かに興味があるって言ったのは私なんで…」

うわぁ～…、この子めちゃくちゃいい子…

「ところで、剣道部部員が少なくて廃部になっちゃうって本当ですか？」

「えぇ、本当みたいよ。」

「だったら私、この部活に入ります！」

彼女は決心したようで、大きな声でそう言いきった。

「ほら。」

部長が出てきて彼女に白い紙を渡した。

「入部届けだ。ビシバシ鍛えるから心しておけよ。」

そう言って、同じ紙を私とティアにも渡した。

「神凪（かんなぎ）　唯（ゆい）、ここの部長だ。」

私たち3人が入部届けを提出すると、部長は早速実力が見てみたいようで、道着やら面やらを持ってきていた。

「私1人で3人を相手するのは時間がかかる。秋、林、準備をして来い。」

やる気満々だ…

「あの、純先輩。夜先輩とはどういう関係なんですか？瑠璃は夜先輩のことは兄だって…。それで、先輩のことは姉だって言ったっていうことは、つまり、先輩と夜先輩は兄妹なんですか？」

「…」

ヤバイ…焦りすぎて何て応えたらいいのか分からない…

「どうなんですか！？」

さらに追いたててくる憂希。

「憂希ちゃ～ん、どうしてそんなに夜くんのことを気にしてるのかな～？」

一部始終を聞いていた愛美が会話の中に入ってきて、私たちの話題から話をそらした。

「え？あの…それは…」

憂希は明らかに言いにくそうな様子で顔を真っ赤にしていた。

もしかして、この子も夜のことを…

「もしかして、憂希ちゃん、夜くんのことが…」

「そ、そそんなわけないじゃないですか！！」

声が上ずってるし、まったく説得力がないんだけど…

「おい、おまえたちも早く着替えてこないか。」

彼女への救いの手とばかりに、部長からの指示が飛んできた。

「ほう…おまえたち兄妹だったのか…。」

しかし、部長の隣を通ったときに、そんな部長のささやきを耳にしたような気がした。

「よーし、林は紅月妹、秋は桜乃を相手してやってくれ。私は紅月姉を相手する。」

紅月姉やら妹やら名前で呼ぶってことはできないのかしら…。もしかして、名前覚えられてないとか？

「それでは各自始めてくれ！」

部長が言い終わって数秒すると、パシンという音と共にドスンと何かが落ちたような音がした。

「林先輩？少々張り合いがなさすぎではありませんか？」

見ると、ティアが林くんの目の前に竹刀を突き付けているのが目に入った。

「おまえの妹も夜に似て優秀だな。それでは、夜の兄妹であるおま

えにも期待が持てそうだ！」

部長が竹刀を早くも左手に持ち代えていた。

「ところで部長、その妹やら姉って呼び方じゃなく、名前で読んで欲しいのですが…」

「私に勝てたら考えてやろう！」

そう言って竹刀を振り下ろしてくるが、これはフェイントで部長は真横から竹刀を振ってきた。

「やはり面白い試合ができそうだ。」

その打撃を受け流すと、さらに部長はフェイント混じりの連続攻撃を放ってきた。

「少しは攻撃してきてくれないと勝負にならないぞ。」

部長がまたフェイントを仕掛けてくる。

…今！

一瞬の隙を突いて部長の懐に入り込む。しかし、部長に焦りの色はなかった。

「かかった！」

フェイントかと思われたその打撃は止まることなく下ろされていた。

後ろには…この距離じゃ間に合わない。それなら…

部長の胴を狙って竹刀を振るう。

パァン！！

ほぼ同時に鋭い音が響き渡る。

「私の勝ちだな。」

「いえ、私の勝ちですよ、部長？」

どちらとも言えない勝敗だった。しかし、部長がそんなことを言うので、こっちも黙っているわけにはいかなかった。

「「…」」

「は～い！2人ともそこまで！っていうか、引き分けでいいじゃないですか！」

にらみ合って動かない私たちの間に入って愛美がそう言った。

「いや、あれは私の方が速かった。」

「そんなはずありませんでしたよ。私の攻撃の方が…」

それでも止めようとしない部長。しかし、言われっぱなしにはしたくない私。

「はいはい、一度お茶でも飲んで気分を落ち着けてみたらどうかしら？」

桐原先輩が私たちを引き離し、お茶を持ってくる。

「いや、あれは私の勝ちだった…」

「そうね。」

部長の愚痴を聞く先輩。なんだか保護者のようだった。

「先輩にもあんな一面があるんですね。」

桜乃さんが私の隣に座って話しかけてきた。

「あんな一面？」

「ほら、先輩って外見だけ見ればクールビューティーな人じゃないですか。それに似合わず、あんなに負けず嫌いだっただなんてかなり意外でした。」

「悪い？」

「いや、決して悪いということではなくて、可愛い一面もあるんだなぁ～って。」

「そう？私なんかよりもあなたの方が可愛いと思うけど。」

からかい半分本気半分で言ってみると、少し顔を赤くしていた。

「そういうところが憂希ちゃんの可愛いところだよね〜！」

愛美が桜乃さんの背後から現れた。

「ちょっと、愛美先輩！どこ触ってるんですか！」

背後から飛び付いてくる愛美に桜乃さんが抵抗している。

下級生に抱き付くってどうなのかしら？しかも、同性の。

「ちょっと発育不良気味？」

愛美がそんなデリカシーのないことを言ったとたんに桜乃さんは酷く落ち込んでしまって、その場でうずくまっていた。

「桜乃さん！私なんてそのくらいの歳の時は小学生かってくらいだったんだから、自信持って！！」

必死に勇気づけようと最近までの自分のことを話す。

「そんなわけあるはずありません…」

チラリと私の体を見ると、さらに落ち込んでしまった。

嘘じゃないのに…

「お姉さま！大丈夫ですか！？」

ショックを受けていた私に近づいてきたティアがそう声をかけた。

…ティアがいるじゃない！

「桜乃さん！あなたと同い年の瑠璃なんてあなたよりも発育が遅れてるんだから大丈夫よ！」

「お、お姉さま！？」

ティアは珍しく鋭い目付きで私を睨み付けてきた。一方の桜乃さんはティアの方をチラチラと見ていた。

「そう…ですよね！きっと今からですよね！」

元気を取り戻した桜乃さん。その横で私をにらみ続けるティア。そして、こんなややこしいことになった原因の愛美はいつの間にか部長のところへ行っていた。

「お・ね・え・さ・ま！私、意外とそのこと気にしていますのよ。それなのに、お姉さまは…。罰として今日は私と一夜を共に…」

「するわけないでしょ！」

とりあえず、桜乃さんが立ち直ってくれたから良しとしよう！

「先輩！私のことは憂希って呼んでくれると嬉しいです！」

「分かったわ、憂希。」

「ところで先輩、夜先輩はどうして今日は来ていないんですか？」

本気で心配しているようで真面目な顔をして尋ねてきた。

「気になる？」

しかし、どうしてもこういう子を見ると、からかいたくなってしまう私がいた。

「ただ心配なだけですっ！先輩、からかわないでください！」

さすがに気付かれたか…

「夜はおじの用事に付き合わされて海外よ。」

「海外ですか！？」

あぁ…こんな真面目な子に嘘をつくなんて、心が痛む…

「でも、2週間ほどで帰ってくるみたい。」

「2週間…長いですね。」

「夜と会えなくて寂しい？」

「そうですね少しは…って、先輩！？」

自分の言ったことに気づいてか、憂希は顔を真っ赤にしていた。

「お！来たか、朱雀。」

急に扉が開いたかと思うと、部長がその方向に向かって手を振っていた。

「神凪会長、部員集めの方はどうですか？」

その来訪者は微笑みを絶やすことなく、優しげな声色で部長にそう尋ねた。

「あぁ、ちょうど集め終わったところだ。」

部長はさっき私たちが書いたばかりの入部届けをその人に渡した。

「はい、確かに受け取りました。」

「朱雀、おまえも大変だな。」

「いえいえ、神凪会長に比べたらこの程度まだまだですよ。」

この人はどうやら生徒会に所属していて、部長の下で仕事をこなしているようだった。

「ねぇねぇ、純ちゃん！あの人、男の子か女の子かどっちに見える？」

愛美も、というよりここにいる全員がそのやりとりを見ていたようで、当の本人たちと桐原先輩以外はみんな同じようなことを考えているみたいだった。

「端的に言うなら男子の格好をした女子ってところかしらね。」

来訪者はその女性らしい顔立ちとはぜんぜん似合わない男子の制服を身に付けていた。

「そうだよね！誰がどう見たって女の子だよね！」

愛美の言う通り、たぶん誰が見ても女の子と思うであろうが、男子の制服を着ている以上は男の子みたいであった。

「でも、仮に女子だったとして学校側が男子の制服を着た女子を容認してると思う？」

「あんなにカワイイのになぁ…」

「別にカワイイから女の子ってわけでもないでしょ？」

「えぇ～！でも、憂希ちゃんとかすっごくカワイイじゃん！」

そう言って、近くに座っていた憂希に飛び付いて頬擦りをしていた。

「あの、ちょっと、先輩！？」

一方の憂希はどうにか押し離そうと必死に抵抗をしていた。

「あのね…。だったら部長を見て愛美はどう思う？」

「部長…？う～ん…」

「カワイイとはちょっと違うでしょ？」

「…カワイイと言うよりはカッコイイ感じ？」

「つまりそういうこと。カワイイ男の子もいれば、カッコイイ女の子もいるってことよ。」

「あぁ～！なるほどね！」

当たり前のことを説明すると、本人は納得してくれたようだった。

大したことは言ってないんだけど…

「フォローありがとうございます。」

いきなり後ろから声が聞こえてきたのでさっと後ろを振り返るとさっきまで話題にしていた彼が立っていた。

「僕は日輪を守護する陰影、月の使者。」

「「「…」」」

私たち3人は彼の言ったことを全く理解できず、ただただ聞くことしか出来なかった。

「朱雀、まだそれを続けてたのか…」

「ええ、これをやらないと始まりませんから。」

呆れたように部長が間に入ると、彼は笑顔でそれに答えた。

「朱雀煉（すざくれん）です。どうぞお見知りおきを。」

「あ、えっと…」

「純さんですね。噂は色々とお聞きしています。」

噂…嫌な予感しかしない…

「私の同級生で副会長を務めてもらっている。」

「あの～、朱雀先輩！先輩って男の子ですか！？それとも女の子なんですか！？」

「そうですね…」

愛美の失礼な質問に彼はそれだけを言って一呼吸おいた。

「僕が男性に見えますか？」

彼は低い声でそう言ったあと、その場で優雅にクルリと1回転して、

「それとも、私は女性に見えますか？」

と、声色を変え、本当に女の子であるかのような上目遣いでそう尋ねた。正直、それを見た後ではさっきまで男性だと確信していたはずであったにも関わらず、女性ではないかという疑念が沸き上がってきた。

「朱雀、おまえにはプライドってものがないのか？」

「そんなものとうのむかしに無くしてしまいました。」
「おまえのそれは男であるとわかっていても疑わざるを得ないものがあるぞ。」
そう部長が言うからにはやはり男性なのであろう。
「まぁ、僕にとっては男であろうが女であろうがそんなことは大した問題ではないんですよ。」
淡々と語るその口調はまるで自分のことなどどうでもいいかのような思いを感じ取ることができた。
「それでは僕は生徒会の方に戻りますよ。」
彼はみんなに軽くお辞儀をし、剣道場から出ていった。
「なんというか…不思議な人でしたね。」
憂希が隣でつぶやくかのようにそう言った。
「つかみ所のない人だったわね…」
「…」
ふと視界に入ったティアはどこか難しい顔をしていた。
「どうかした？」
「いえ、なんでもありませんわ！」

話しかけると、少し驚いたような反応を見せてそう言った。

「そう、そんなはずがありませんわ…」

ティアは自分自身に言い聞かせるようにそうつぶやいていた。

陰謀と書いてミスと読む（前書き）

《人物ファイル》

・名前

桜乃　憂希

さくらの　ゆうき

・誕生日

３月９日

・血液型

Ａ型

・趣味

動物と戯れる、生物観賞。

・特技

動物の気持ちがなんとなくわかったりする（確率６０％ほど）

・容姿

長い黒髪を紐でまとめてポニーテールにしている。同じ歳の友達と比べて少し身長が低く、その分か出るべき部分も平均より小さい。

T　１４９
B　７６
W　５６
H　７８

ティアのクラスメイトで夜に憧れを抱いている。そのためか、よく夜の練習している姿を見に来ていたが、偶然にも夜とティアのキスを目撃してしまいショックを受けていたところでティアからの剣道部のオファー。

性格は真面目で努力を怠らないが周りにも流されやすい。

「あのっ、夜先輩！えっと…その…いい天気ですね！」

陰謀と書いてミスと読む

「…というわけなんですけど、どうにかできませんか？」

部活終了後、私は保健室のソマリア先生のところへ行っていた。話の内容は部長や憂希に夜との関係についてしつこく聞かれたことについて。

「いっそ、兄妹だって言っちゃえばいいんじゃないかしら？」

「それだと色々と面倒なんです。双子って割にはあんまり似ていないし、家に来られて夜を探されたらそれはそれで大変です。それに、あのバカと兄妹とかやってられません。」

「現にバレかかってる今の方が面倒な気もするけど。で、具体的にどうするつもり？」

「例えば、２週間の交代期間を１週間くらいに縮めるとか…」

「それでは根本的な解決にはならないわ。」「それじゃ、どうやって…」

「いっそのこと、切り離しちゃえば？」

「切り離す…？」

「こんなことになるだろうと思って、あなたたちの入学が決まった頃からそのための装置を開発してたのよね。」

この先生、学校の保健室で何してるんだろう…

「それってちゃんとわかれるんですか？」

「そうね。わかれることに関しては問題ないわ。」

「それって、他の点に関しては問題ありってことですよね？」

「まぁ問題って言っても、大したことじゃないから大丈夫よ。」

「…信じられません。」

「あら、そんなこと言ってもバレるのは時間の問題なんじゃない？」

「それは…」

「それなら善は急げ、早いうちにやってしまうわよ。」

グイグイ引っ張っていく先生。私の言葉になんて聞く耳を持っていない。

この人、その機械とやらを使いたいだけでしょ…

先生に連れられ、保健室の一角に来ると、先生は何やら魔力を放出し始めた。

「はい、到着！」

「ここは…」

窓の外の風景を見る限りはさっきまでいた保健室。しかし、複数置かれていたベッドは1つに減り、その代わりに妙な機械やら薬品やらが置かれていた。

「もう分かってると思うけど、ここはパラレルワールド。私の研究室って言った方がいいかしら。」

「なんだか散らかってますね。」

「そうね。でも私の研究室は別にここだけってわけでもないのよ。」

「そうなんですか…」

だからって片付けなくていいって理由には…

「ほら、これよ。」

先生は部屋の中で一番大きいであろう機械を指差して言った。

「準備に少し時間がかかるから、その間に服を脱いでおいて。」

「服を脱ぐ！？」

「あら、当たり前でしょ？こんな精密機械に服なんていう余計なものを入れたら一発でダメになるわよ。」

「いえ…でも…」

「私だって女よ。」

先生だからダメなんですけど…

先生はそれだけ言うと、とても楽しそうに準備を始めた。

（夜！目閉じてなさいよ。）

『いや、無茶言うな。閉じたきゃ自分で閉じろ。』

（心の目を閉じとけって言ってるの。）

『はいはい…』

了承を取ったところで覚悟を決めて着ていた物を脱ぎ捨てていく。

「やっと脱ぎ終わったのね。」

結局脱ぎ終わるまでにかなりの時間を要してしまっていた。

「ジロジロ見ないでください。」

両手で最低限隠せるところは隠しながら尋ねる。

「その手が少し気になるところだけれど、まぁいいわ。そこのベッドに寝転がってくれる？」

さっさと終わらせたかった私は先生の言う通りにベッドに横になった。

「それじゃ、少し眠っておいて。」

【夢眠】

突然かけられた魔術をどうすることもできず、私は眠りに落ちた。

「おい、起きろ。」

聞き慣れた声が私を起こした。

「やっと起きたか…」

目を開くと目の前には…

「…これ、どうなってるの？」

目の前には白衣を着た私が。それに気のせいか声が低い。

「驚かないで聞けよ？」

自分の体をくまなく触る。あるはずのものが無くなり、ないはずのものがあった。

「…鏡。鏡をちょうだい。」

「わかった。」

鏡を受け取り、恐る恐る鏡の向こうを見る。そこには予想通りの夜の顔があった。

「…」

「状況はわかったみたいだな。」

「あの先生は？」

「さぁ？目覚めたときにはもういなくなってた。」

「つまり、治す方法は今はないってことね…」

私はがっくりと肩を落とし、少しの間悲しみにうちひしがれていた。

「それで、この置き手紙。」

机に置かれていたらしい置き手紙に書かれていたのは、

「夜くん、純ちゃんへ。多分別れることには成功してると思うけど、もし何か困ったこと、例えば、心が入れ替わったとかがあったら自分たちの力で解決してちょうだいね。私は魔界に用事があるので、束の間の交換生活を楽しんでね。」

「…」

あの人、わざとやったってことね…

「ほんと、何考えてるんだよ…」
「冗談じゃないわよ…」
「あの人が帰ってくるまでどうする？」
「そうね…。やっぱり普段通りの生活をするしかないんじゃない？」
「この姿で普段通りか…」
「…無理ね。」
「誰かに助けでももらうか？」
「誰かって言ったって、バンパイアのことを知ってるのは愛美とティアだけでしょ。」
「いっそのこと、2人に話してしまった方がいいんじゃないか？」
「だいたいあの2人なら話さなくても気付きそうね…」
珍しく意見も一致し、とりあえず家に帰ることにした…のだが…
「…で、どうしろって？」
「私が着せる。」
着てきた制服をどうするのかが次の問題になっていた。

「そんなのこだわる必要あるのか？」
「あるわよ！」
「それに今のおまえの体、俺のだけど？」
「…まあしょうがないわ。」
「別に着替えなくてもいいんじゃないか？」
「学校の生徒が白衣を着て下校するって怪しすぎるでしょ！」
「そうか…？」
「そうよ！」
観念したようで、夜は机に置かれた制服をこちらに放り投げるとベッドの上に腰かけた。
「目、瞑ってなさいよ。」
「言われなくてもやってる。」
色々と確認した上で白衣を脱がせにかかった。
ガラガラ…
「「！！！」」
扉の開いた音がした。自分でも驚くほどのスピードでベッドを仕

切るカーテンを閉め、夜を押し倒し、布団を慌てて被った。

「あれ～？純ちゃん、保健室に入って行かなかったっけ？」

「間違いなくこちらにお入りになりましたわ。」

「愛美先輩、こういう尾行はどうかと思いますけど…」

「純ちゃんが1人で急いでどこかへ行くなんて滅多にないからね～。一体何のために急いでるのかを知るためにはこれが一番手っ取り早いんだよ！」

「私もお姉さまが一体どのような隠し事をしているのか知りたいですわ！」

愛美、ティア…あんたたち一体何考えてんのよ…

どうやら保健室に入ってきたのは、愛美、ティア、憂希の3人のようだった。

『…くすぐったいんだけど…』

（我慢しなさい！）

私は見つかってしまったときのことを考えるので頭が一杯だった。

「愛美先輩、探すつもりならあからさまに怪しい場所が一ヶ所ありますよね？」

「そうだね～。カーテンが一ヶ所だけ閉まってるなんてあからさまに怪しいよね。」

憂希…なんだかんだ言って、あなたもやる気満々じゃない…

なんだか裏切られたような気がした。

「それにしてもお姉さまが私たちに隠れてまでやることとは一体何なんでしょう？」

「それは～…アレだよアレ！」

「先輩、アレって何ですか？」

「こんなカーテンで仕切られたベッドの上で隠れてすることといったら1つしかないでしょ？」

「お姉さまもお年頃ですからね～。」

「純先輩が学校でそんなことを…」

あぁ…私のイメージが崩れてゆく…

『アレってなんだ？』

（あんたは知らなくていいの！）

そのとき、シャッとカーテンが開けられた音が聞こえた。

「これは間違いないね。」

「そうですわね。」

「先輩…」

ヤバイ…どうしよう…

この絶体絶命の状況では何も思い付かなかった。

「みんな心の準備はいい？」

「はい、いつでもいいですわ。」

「…はい。」

そして、中と外を分けていた布団がどけられた。

「…お姉さまにお兄さま！？」

「…私たちの想像以上のことを…」

「せ、先輩…」

「「…」」

沈黙した空気の中、ドサッと憂希が倒れた。

「とりあえずさ、コイツをどうにかしない？」

夜が珍しくまともなことを言った。

「純ちゃん…だよね？」

「お姉さま、今なんと？」

しかし、中身が入れ替わっていることを知らない２人はその普段と違った言葉遣いにかなり驚いていたようだった。

「…そんなことがあったんだ～。」

「つまり、お姉さまの体にお兄さまが、お兄さまの体にお姉さまが、ってことですわ。」

「そういうこと。」

なんとか事情を説明し終えると、思った以上に２人ともあっさり納得してくれた。

「それよりも！」

「お姉さまとお兄さまが何故ベッドの上であんなことをしていたんですの！？」

入れ替わりよりも単にそっちに興味があるだけなのね…

「何でって言われてもな…コイツが押し倒してきたから後はその流れにのっただけだけど。」

夜がそう言ったとたんに２人が私を変なものを見るかのような目

で見てきた。

「言っとくけど私はただ隠れようとしただけよ。」

「そんなの分かってるって〜。」

だったら、そんな目で見るな！

「そんなことよりもその言葉遣いどうにかなりませんか？」

「そうそう！入れ替わっちゃったんだから、そこんとこちゃんとしとかないとバレちゃうよ！」

「まぁ、言われてみれば…」

って、急に言われてもできるわけないでしょ！

「やはりここは特訓あるのみ！今晩しっかり練習しましょう、お姉さまっ！」

「あんたは下心見えすぎ！」

「お姉さま、そんなことありませんわ。」

「だいたい普段から夜の近くにいた愛美が私の指導を、瑠璃が夜の指導をしなさい。」

「えぇ〜！私は夜くんと…」

「却下」

「お姉さま、酷いです…」
「そんなこと言ってる暇があったら、憂希が起きたときのごまかしでも考えときなさい！」
「あっ、そっか！」
絶対憂希のこと忘れてたでしょ…
「私がいると邪魔だろうし、先に家に帰っとくわ。あと、夜に制服着せておかないと、白衣のままじゃ不自然よ。」
バンパイアの身体能力で人には見つからずに済むでしょ。
「りょ～かい！さぁ夜くん、覚悟はいい？」
「は？覚悟って…うわっ！」
愛美が夜に飛びかかるのを横目で見ながら、保健室を後にした。
「私もお兄さまのお着替えをお手伝いしますわ！」
「重い！離れろっ！」
「離れたら着替えれないでしょ～？夜くんは恥ずかしがりやだなぁ～！」
…私の体、もつかしら…

陰謀と書いてミスと読む（後書き）

夜「明日から休んでもいいか？」

ティア「だめですわ、お兄さま。」

愛「そうそう！学校は大切だよ。」

純「あんた、単に面白がってるだけでしょ。」

愛「いつボロが出るかニヤニヤして見守っとくだけだよ！」

純「それを面白がってると言わず何と言うのよ！」

ティア「とにかく学校には行ってください。」

夜&純「「…学校潰そうかな…」」

愛「…2人とも発想がちょっと…」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7179j/

二人のバンパイア

2011年10月6日15時09分発行